533
98

ガリラヤの道

内村鑑三

大正
14. 9. 18
内交

533-98

序詞

人は何人と雖もキリスト傳を書くことは出來ない。キリスト御自身のみ能くキリスト傳を書くことが出來る。そして彼は既に聖靈を降して之を書かしめ給うた。馬太傳、馬可傳、路加傳、約翰傳がそれである。後世に成りし如何なるキリスト傳と雖も是等の最初の傳記に改良を加ふる事が出來

ない。我等は新たにキリスト傳を編まんと欲して單に最初のキリスト傳に註釋を加ふるまでゞある。

此書はキリスト傳の一部にして、キリストのガリラヤ傳道の記事である。史家カイムの所謂「ガリラヤの春期」の記事である。ガリラヤ湖面に未だ十字架の影は映らず、ヘルモンの巓より恩惠の露が渥く其畔を潤せし時の記錄である。四福音書の本文に著者の觀察と默想と體驗とを加へたるものである。

滾々として流れて盡きざる生命の泉に讀者を導くための手引に過ずと雖も、爲さゞるに勝さる試みであると思ひ、之を世に提供したる次第である。

神の祝福の之に伴はんことを祈る。

一九二五年七月十六日

内村鑑三

目次

第一回　福音の始……一
第二回　先驅者ヨハネ……九
第三回　イエスの受洗……一六
第四回　野の試誘（上）……二四
第五回　野の試誘（中）……三二
第六回　野の試誘（下）……四一
第七回　傳道の開始……四九
第八回　弟子の選擇……五八
第九回　ガリラヤ湖畔の一日……六六
第十回　傳道と奇跡……七四

第十一回　赦しと癒し……八三
第十二回　税吏マタイの聖召……九一
第十三回　舊き人と新しき人……九八
第十四回　安息日問題……一〇七
第十五回　山上の垂訓……一一五
第十六回　祝福の辭（上）……一二三
第十七回　同　（中）……一三〇
第十八回　同　（下）……一三七
第十九回　鹽と光……一四五
第二十回　キリスト復活の實證……一五二
第二十一回　基督教對舊道德……一五七
第二十二回　隱れたる宗教……一六五

第二十三回　空の鳥と野の百合花……一七三
第二十四回　基督信者の簡易生活……一八〇
第二十五回　審く勿れ……一九五
第二十六回　豚に眞珠……一九七
第二十七回　黄金律……二〇五
第二十八回　生命に入るの門……二一三
第二十九回　僞りの預言者……二二二
第三十回　言表と實行……二三〇
第三十一回　イエスの奇蹟と其模範……二三八
第三十二回　軍人の信仰……二四七
第三十三回　家事の祝福……二五七
第三十四回　宇宙の制御……二六八

△

目次

第三十五回　ガダラの出來事……二七八
第三十六回　ヤイロの娘……二八八
第三十七回　眼を開かれ舌を釋かる……二九八
第三十八回　ミッションの開始……三〇八
第三十九回　十二使徒の選任……三一九
第四十回　傳道師と其責任……三二七
第四十一回　迫害の道……三三三
第四十二回　懼るゝ勿れ……三三八
第四十三回　愛の衝突……三四三
第四十四回　冷水一杯……三五〇
第四十五回　イエス、バプテスマのヨハネに疑はれ給ふ……三五五
第四十六回　イエス、ヨハネを辯護し給ふ……三六一

ガリラヤの道

第一回　福音の始

馬可傳第一章第一節

何れの著書に於ても最も大切なるは卷頭第一の言である。其れは問題の提出であり、其解答の豫告であり、其精神の發表であり、其全部の縮寫でなくてはならない。大著述の特徴は其の深き、重き、短かき卷頭の一言に於てある。

そして此點に於て聖書六十六卷は何れも大著作の模範である。創世記第一章一節は創世記の縮寫であつて、同時に又全聖書の豫言である。故にユダヤ人は此書を稱ぶに其卷頭第一の詞なるバレシース（始にの意味）を以てする。出埃及記、民數記略等皆な同じである。新約聖書に至つては、馬太傳第一章一節は

福音の始

全篇を豫表し、有名なる路加傳の序文は著者のイエス傳の如何なるもの乎を紹介して餘す所なし。約翰傳卷頭の一言に至つては、其の深さと廣さとは全宇宙と其大さを共にすると言ふ事が出來る。若し聖書の大意を知らんと欲せば、各書卷頭第一の語を研究するに如かず。聖書が神の言なる證據の一を此點に於ても亦見ることが出來る。

「神の子イエスキリストの福音の始」、是が馬可傳卷頭第一の言である。原語に於ては冠詞を合せて僅に七言、四福音書中最も簡單なる緒言である。然し乍ら簡單ではあるが、意味深長にして、簡潔なる馬可傳に最も應はしき緒言である。馬可傳全體は此の短き一言の内に籠れりと云ふ事が出來る。

原語の順序に從へば「始、福音、イエスキリスト、神の子」である。何れも重い詞である。「始」「始に神天地を造り給へり」と創世記一章一節は言ふ。「始に道あり、道は神と偕に在り、道は卽ち神なり」と約翰傳一章一節は言ふ。

「始」は實に重い、意味の深い詞である。「始」は新らしい始である。未だ曾て在つたことの無いものが在り始めたと云ふ事である。萬物に始が在つたと云ひ、福音に始があつたと云ふ。詞其物が有神論的である。無神論又は近代流行の唯物的進化論に「始」なるものはない。彼等は曰ふ「物として原因なきはなし。宇宙は原因結果の連續である。始とは宇宙以外より來る新勢力の注入である。斯かる事は在り得べからず」と。然るに聖書は言ふ「始あり」と。宇宙は神が始め給ひし者、キリストの福音もまた神が始め給ひし者、而して人が基督者と成るたび毎に新らしき創造が行はるゝのであると。聖書は無限に其れ自身進化發達する宇宙の存在を認めない。宇宙は造られしもの、故に始ありしもの。福音も亦歷史上の必要に强ひられて自づから現れし者に非ず、神の聖旨に從ひ、彼が選び給ひし時に於て、彼の遣し給ひし人に由て始つたものであるとは、聖書が明白に敎ふる所である。事は哲學上の大問題である。然れども聖書の此敎

示を受けずして信仰的生命なるものはない。祈禱と云ひ、攝理と云ひ、救拯と云ふは皆な神の特別の干渉を信ずるに依る事である。若し之れなからん乎、祈らざるに如かずである。神の存在を信ずる以上、宇宙を「永久に自から回轉する機械」として見る事は出來ない。之に新しき勢力の注入がある。新しき活動の開始がある。之あるが故に我等に希望が起るのである。神はキリストの福音を始め給うた。而して今猶ほ之を續行し給ひつゝある。而して始めの内に亦始めがあつて、彼は基督者各自の心の中心に善き工を始め給ひて之を主イエスキリストの日までに完成せんとし給ひつゝある（ピリピ書一章六節）。「此故に人キリストに在る時は新たに造られたるなり。舊きは去りて皆な新しくなる也」とあるは此の事である（コリント後書五章十七節）。進化論の言を以て言へばmutation である。絶對的新種の現はれである。而して天然界に此事あるや否やは未決問題であるとするも、心靈界に此實驗あるは夥多の基督者が證明して止

まざる所である。

第二の重い詞は「福音」である。原語のユーアンゲリオン、「喜ばしき音信」の意である。歡天喜地の天來の音信である。福音の文字が甚だ輕く用ひらるゝ今の世に在りて我等も亦之を淺く解するの虞がある。然れども「福音」は重い深い詞である。クリスマスの夕、天使が牧羊者に告げて「我れ萬民に關はる大なる喜びの音を汝等に告ぐべし」と言ひしが此福音である。即ち神が人となり、此世に現はれ、その罪を任ふて十字架の死に就き、死して甦り、而して再び來りて萬物の復興を行ひ給ふと云ふ、其の事がキリストの福音である。斯くして福音と云ひて單に音ではない。キリストの福音は美き音樂ではない。歌ではない。理想ではない。歴史である。固き事實である。確に在りし事である。喜ばしき事實の音信である。故に本當の福音である。故にイエスキリストの福音と云ひて、其歴史又は傳記と云ふも差支ないのである。馬可傳はキリストの生涯

に關はる事實の記錄である。而かも簡潔にして理想化されざる事實其儘の記錄である。馬可傳の貴きは之が爲である。之を佛敎の經典に比べて見て天地の差がある。福音は比喩に非ず、また哲學に非ず。地上に於ける神の子の生涯を、人類歷史の一部分、然り其中心として錄す者、其れがユーアンゲリオン卽ち福音である。

福音の歷史的性質を認めて、之を解するに信仰のみならず又所謂史的感能の必要なる事が判る。能く史實の眞僞を辯別するの能力を有する者、其れが本當の史家である。英のフリーマン、獨のモムセン、伊のフエレロー等はすべて此能力を有せる人である。奇跡を載するが故に史實に非ずと斷ずるは、史學ではなくして哲學である。史家は事實を判斷する者である故に在りし事實は史的事實として之を取扱ふ。言あり曰く「地理と年代とは歷史の兩眼なり」と。キリストの歷史なる福音を研究するに方て、地理と年代とを忘る事は出來ない。我

等は各自單に信仰養成の爲のみに非ず、世界歷史修得の爲に、各自相應の史的感能を利用して、福音書の研究に當る可きである。

第三に重い詞は「イエスキリスト」である。イエスは人名であつて、キリストは職名である。キリストなるイエスである。キリストは希伯來語メシヤの希臘譯であつて受膏者の意である。アブラハム以來、預言者等を以て、神が其選民イスラエルに就て約束し給ひしすべての約束が充たさるゝ者である。ダビデの子と稱してイスラエルの民の理想の王である。イスラエルを贖ふ者と稱して彼等に完全の獨立と無窮の榮光とを與ふる者である。而してイエスキリストと稱してナザレのイエスは此王であると云ふのである。事はイスラエルに取りては最大問題であつた。イエスは預言者の一人であるとは彼等は信じて疑はなかつた。然れども彼がキリストであるとは、昔も今もイスラエル人の多數が否定して止まざる所である。そしてペテロが十二弟子を代表してイエスに對つて

「汝は神の子キリストなり」と言ひし時に彼は大告白を爲したのである。イエスキリスト論は異邦人に取ては小問題であつたが、ユダヤ人に取ては最大問題であつた。而して今日と雖もユダヤ人と基督者との別るゝ所は此點に於て在る。基督者はイエスはキリストであると云ひ、ユダヤ人は非ずと云ふのである。そしてマカは基督的歴史家として大膽に、明白に、イエスキリストと稱して其驚くべき生涯の事蹟を記述したのである。

第四に重き詞は「神の子」である。是は單にダビデの子と云ふが如きメシヤ卽ちキリストの別名でない。馬可傳の記事其物が明にイエスが人の子にあらずして神の子なる事を示すのである。若しイエスを神の子と呼びし者がマコ一人に限るならば、或は之をキリストの別名と云ふ事が出來る乎も知れない。然れども新約聖書は他の多くの箇所に於て明にイエスの神性を唱ふるのである。「道は卽ち神なり」と云ひ、「萬物彼に由りて造られ、又彼に由りて存つ事を得る

なり」と云ふ。其他イエスの先在並に萬能性に就て述る言は多くある。馬可傳は人なるイエスの傳記でない。神の子の福音である。さう見ずして難解百出、到底其眞意を探ることが出來ない。神の子の傳記である。故に其内に奇蹟のあるは當然である。我等は其覺悟で研究に取掛らねばならぬ。

第二回　先驅者ヨハネ

馬可傳一章二—八節。路加傳三章一—一八節。約翰傳一章一九—三七節。

バプテスマのヨハネ、彼は如何なる人でありし乎。イエスは彼に就いて曰うた「誠に汝等に告げん、婦の生みたる者の中に未だバプテスマのヨハネより大なる者は起らざりき」と（馬太傳十一章十一節）。卽ち彼は人として最も大なる

者であつたと。果してさうである乎。

ヨハネは第一にイエスの紹介者であつた。「世の罪を任ふ神の羔を視よ」と曰ひてイエスを世に紹介した者は彼であつた。紹介の任たる最も重い者である。先づ第一に紹介すべき人の誰なる乎を充分に知悉さねばならぬ。第二に己が全責任を擔ふて紹介の任に當らねばならぬ。第三に彼と我と責を分ちて事業に臨まねばならぬ。紹介は容易に爲すべき事でない。而して爲した以上は其責任を避けてはならない。ヨハネはイエスをキリストとして彼の不信の國人に紹介した。其行爲の大膽なる、後に至て弟子等が彼をキリストなりと認めて世に唱道したに遙に勝さる者である。當時天下にイエスの誰なる乎を知つた者は唯ヨハネ一人であつた。偉人のみ偉人を知る。大工の子イエスを捉へて「我は屈て其履の紐を解くにも足らず」と言ひし彼は能くイエスを知つた人であつた。イエスは一人の知己を以て世に出で給うた。彼に取り如何に力强かりしよ。獨り高

壇に立つさへ苦しいのである。縱令イエスと雖も世に現はるゝに方て紹介者を要し給うた。其紹介の任に當りし者がバプテスマのヨハネであつた。彼はたしかに婦の生みし者の中に最も大なる者であつた。

ヨハネは第二にイエスの先驅者であつた。「野に呼べる者の聲あり、曰く主の道を備へ、其道筋を直くせよ」とある預言者の言に適ふ者であつた。是れ亦大役である。戰爭で云へば先陣である。文化事業で云へば開拓者である。暗黑大陸發見の途に上りしコロンブスである。勇ましくもあれば亦困難でもある。そしてバプテスマのヨハネは神の國建設の先驅者であつたのである。單獨で、勇敢で、世に一人の同情者あるなく、獨り視て獨り望み、獨り歎きて獨り泣く。「ヨハネ野に在りて駱駝の毛衣を着、腰に皮帶を束ね、蝗蟲と野蜜を食へり」と。當時の社會と敎會とは彼に就て言うたであらう、彼は不平家である、隱遁者である、自から神の恩惠を斥けて無益に難業苦行する者であると。彼等は彼の不

平の理由を知らなかつた。彼は世に容れられないとて歎かなかつた。王公貴族に愛せられないとて憤らなかつた。彼に不平があつたが夫れは聖い貴い不平であつた。彼は神の國を示された。其實現を望んだ。而して大理想、大希望に壓せられて平らかなること能はずであつた。人は彼が抱く理想の高き丈け其れ丈け孤獨である。大なる詩人、宗教家、政治家は凡て孤獨であつた。彼等は所謂宇宙的悲歎に捉れたる者である。今や社交的なるを以て文化生活の第一要素と見做すと雖も、すべての大なる進歩、又は向上、又は發見は孤獨の人によつて爲されたのである。バプテスマのヨハネの眞價の認められざる社會より大人物は決して起らない。

ヨハネは如何にしてイエスの爲に道を備へ其徑筋を直くした乎。嚴格なる正義を唱へ、之を行ふ事に由てゞある。「嗚呼蝮蛇の裔よ、誰が汝等に來らんとする怒を避くべき事を告げしや。然らば悔改に符へる果を結ぶべし。……今や斧

を樹の根に置かる、故に凡て善果を結ばざる樹は伐られて火に投入らるゝ也」と（路加傳三章七—九節）。之は審判であつて恩惠でない。嚴格なる正義の唱道であつて罪の赦しの福音でない。然れども正義の無き所に福音は有り得ない。審判の無き所に罪の赦しは說き得ない。斯くしてヨハネ有つてのイエスである。預言者なくしてキリストは世に現はれ給はなかつた。イエスとヨハネを比較て、二者の優劣を論ずるは無益の業である。神は先づヨハネをして嚴格なる正義を說かしめて、然る後にイエスを以て罪の赦しの福音を傳へしめ給うた。先づ美き土壤を作らしめ、然る後に善き種を播かしめ給うた。故に三十倍、六十倍、百倍の果を結んだのである。

嚴格なる正義の準備なき所にキリストの福音の榮えた例はない。其意味に於てヨハネのみならず凡ての預言者はイエスの先驅者であつた。神の子は恩惠の福音を齎らして、峻嚴なる道德の行はれざる所に現はれなかつた。モーセとエ

リヤとエレミヤとバプテスマのヨハネとは、イエスの現はるゝが爲に必要であつた。舊約を排して新約は解らない。シナイ山の焰を以て燬盡されずして、ガリラヤ湖の水の潤ひに與かり得ない。ビューリタン道德があつて健全なる英米の基督敎が有り得たのである。今や是れ無きに至つて眞の福音は地を拂ふに至つた。日本に於ても最も善き基督者は嚴格な武士の家に起つた。「上のお情」ある を知つて、道の犯すべからざるを知らざりし所謂る町人百姓は、キリストの福音に接するも、唯愛の甘きを喜ぶに止つて、義の辛くして貴きに堪へ得ない。其意味に於て純潔なる儒敎と公正なる神道とはキリストの福音の善き準備であつた。伊藤仁齋、中江藤樹、本居宣長、平田篤胤等は日本に於て幾分にてもバプテスマのヨハネの役目を務めた者である。之と較べて、佛敎、殊に淨土門の佛敎は、阿彌陀の慈悲を唱ふる事餘りに切なりしが爲に、却て神の義に基くキリストの福音を正解する上に於て多くの妨害を爲した。

「鞭と譴責とは智慧を與ふ、任意になし置かれたる子は其母を辱かしむ」とある（箴言廿九章十五節）。嚴格なる父と母と師とを有ちたる子は福ひである。自由解放と稱へて「鞭と譴責」とは之を其凡ての形に於て排斥する者は眞理の罷鏟に與る事は出來ない。近代人はバプテスマのヨハネを嫌ひ、彼を避け、彼に依らずして直にイエスに至らんと欲して其目的を達し得ない。先づ正義の小學に學ばずして福音の大學に入ることは出來ない。アンデレの如く先づヨハネの善き弟子でありし者が、イエスの最も善き弟子と成つたのである（約翰傳一章卅五節以下）。イエスの地上の御生涯が福音の始でありしが如くに、其福音は又ヨハネの峻嚴にして犯すべからざる生涯を以て始つた者である。

第三回　イエスのバプテスマ

馬可傳一章九—十一節。馬太傳三章十三—十七節。路加傳三章廿一、廿二節。約翰傳一章卅二—卅四節。

バプテスマはヨハネ又は基督教を以て始つた者ではない。是は古代民族の間に廣く行はれし儀式であつた。そしてユダヤ人の間に在ても亦入會又は入門の式として一般に行はれた。異邦人がユダヤ教に入る時に此式が行はれた。又ユダヤ人にして凡俗以上の新生涯に入らんと欲する者は此式を受けた。故にヨハネはバプテスマを施して、其當時一般に行はれし入門式を採用したに過ぎなかつたのである。彼の特徴はバプテマスの式に於て在つたのではない。式の目的に於て在つたのである。將さに顯はれんとせし神の國に納られんが爲に罪の悔

改を表する爲のバプテスマであつたのである。夫故に之を稱して「罪の赦しを得させんが爲の悔改のバプテスマ」と云うた。又は單に「ヨハネのバプテスマ」と云うた(行傳十八章廿四節)。そしてイエスは茲に此ヨハネのバプテスマを受けんとして、ガリラヤのナザレよりヨルダンに來り給うたのである。

故に問題は「イエスは何故にヨハネのバプテスマを受け給ひし乎」と云ふに在る。イエスはキリストであつて神の子であつた。彼に悔改むべき罪はなかつた。馬太傳は此事に關し記して言ふ「此時イエス、ヨハネにバプテスマを受けんとてガリラヤよりヨルダンに來り給ふ。ヨハネ辭みて曰ひけるは我は汝よりバプテスマを受くべき者なるに汝反つて我に來る乎。イエス答へけるは暫く許せ、如此凡て義しき事は我等盡す可きなりと。茲に於てヨハネ彼に許せり」と(三章十三—十五節)。

「凡て義しき事は我等盡すべきなり」と。「義は凡て應に之を行ふべし」との意

である。純聖のイエスがヨハネの施せる罪の赦しのバプテスマを受くるは善事(よきこと)である。故に彼は之を受け給うたのである。(聖書の語法に由れば善はすべて義である。義(たゞ)しき事と云ふは善(よ)き事と云ふと同じである)。第一にヨハネは獨り天下に向つてイエスをキリストとして紹介した。イエスは之に對してヨハネと彼のバプテスマを認めざるを得ない。是れ友誼の命ずる所、義である、善である。イエスは神の子たるの榮光を賭してヨハネの傳道に裏書(うらがき)し給うたのである。イエスは最良の友人(フレンド)であつた。故に友誼に酬ゐるに厚くあつた。ヨハネは其預言者たるの名譽を賭して大工の子イエスを神の子、イスラエルの王として世に紹介した。彼の此勇敢なる行爲に對して酬ゐる所なからざるべけんや。茲に於てかイエスは神の子たるの榮光を賭してヨハネよりバプテスマを受けて彼と彼のバプテスマとの神より出たる事を證(あか)し給うたのである。世には自分の地位の傷けられん事を虞れて、善とは知りつゝも公然立つて友人と彼の事業とを證(あかし)す

る者甚だ尠きに省みて、イエスの此行爲の美はしさが思ひやらるゝのである。衆人の間に隠れて窃に彼を讃美するのではなく、人知れずして同情の寄附を爲すに止まらず、公然身を以て彼の教訓指導に與る。矛盾と云へば矛盾である。純潔は洗はるゝの必要なしと云へば云へよう。然れども友誼には友誼の法則がある。義を見て爲ざるは勇なき也。イエスは此場合に自己を忘れてヨハネのバプテスマを受け給うたのであると信ずる。而してヨハネはイエスの此行爲に由て如何に力附けられしよ。イエス一人の證明を受くるはユダヤ全國の承認を受くるよりも力强く感じたに相違ない。神の人は如此くにして相互を援くべきである。世の認めざる者を認め、其事業に參加し以て神の榮光の宣揚を計るべきである。然れども事實は如何。「君不(ヤ)見管鮑貧時交、此道今人棄如(テシ)土」と杜子美の詩に云ふが、イエスとヨハネとの聖き交(まじはり)も亦今の基督信者は棄てゝ泥の如しではない乎。

第二に、イエスがヨハネの施せる罪の赦しのバプテスマを受け給ひしには他に猶理由があつた。罪を知らざりしイエスに悔改のバプテスマを受くるの必要はなかつた。乍然ら彼は「世の罪を任ふ神の羔」として世に現はれた者であつた。故に其資格を以てしてヨハネのバプテスマに與り給うたのである。「神は罪を識らざる者を我等の代りに罪人となせり、是れ我等をして彼に在つて神の義となる事を得しめん爲なり」とパウロが曰ひしが如くに、イエスは此場合に於ても亦罪人に代り彼等を代表して罪の赦しのバプテスマを受け給うたのである（コリント後書五章廿一節）。死するの必要なき者が罪人に代つて死にしやうに、悔ゆるの必要なき者が茲に悔改を表し給うたのである。是れ彼に取り至大の謙遜であつた。然れども謙遜は彼の全生涯の特徴であつて、此場合にのみ限つたことではない。イエスのバプテスマは彼の十字架上の死の前兆であつた。彼は聖善の神の子なるに自から選んで罪人と運命を共にし給うた。イエスのバプテ

スマの意義と其美しさとは茲に在るのである。

此意義あるバプテスマ、之を受けて「水より上れる時天裂け、御靈鴿の如く己に降るを見給ふ。且天より聲出づ曰く汝は愛子なり我れ汝を悦ぶ」と。是は事實文字通りにあつた事である乎、或は靈的實驗を物的事實として書記したる者である乎、之を確定する事は出來ない。然れども其確實なる事實でありし事は確である。茲に勇敢なる信仰的行爲が遂げられたのである。そして之に對して父なる神の嘉尙があつたのである。父は子の行を嘉し、聖靈に由て二者の關係が一層密接にせられたのである。「天裂け」と云ふ。今まで閉されし天が神の子の贖罪的行爲に由て急に開かれ、恰かも天幕の覆ひに裂目を生じ、日光が之を通うして幕内を照せしが如くであつた。殊に美はしきは聖靈鴿の如くに降れりと云ふ事である。靜かに、濕やかにヘルモン山の露がエルサレムに降るが如くに、此時聖靈がイエスの上に降つたのである。聖靈の降臨と云へばペンテコス

テの日に於けるが如くに、「天より迅風の如き響ある焔の如きもの現はれ分れて各人の上に止まる」と思はるゝのが常である（行傳二章二、三節）。然るにイエスの此場合に於ては之と全く異なり「聖靈鴿の如く己に降るを見給ふ」とある。そして聞き給ひし語はペテロに由て引用されし「我れ上なる天に奇跡を現はし、下なる地に休徴を示さん。即ち血あり火あり烟あるべし」との預言者ヨエルの言にあらずして、「汝は我が愛子、我れ汝を悅ぶ」との父の聲であつた。聖靈の降臨の必しもペンテコステの日のそれに倣ふ者にあらざる事は、イエスの此場合に見て明白である。

そして如何にしても我等も亦此靜かなる聖靈の降臨に與る事が出來る乎と云ふに其途は明瞭である。即ちイエスの跡に從ひ、彼が行ひ給ひしやうに行ふ事に由てゞある。即ち己が地位と名譽とを賭して友人の高貴なる事業に參與し、又他人の罪を己が身に擔ひて彼に代りて苦しむ事に由て、我等も亦父なる神の

喜倚に與り、「汝は我が愛子なり」との彼の賞辭に接する事が出來るのである。聖靈は神が人の祈求に應へて與へ給ふ最大の賜物である。そして祈禱に言葉を以てすると行爲を以てするとの二がある。そして若し言葉を以てする祈禱に應ふるにペンテコステの日に於けるが如き迅風烈火の如き聖靈の降臨があるならば、高貴なる行爲を以てする祈禱に應ふるにヨルダン河の畔に於けるが如き鴿の如き聖靈の降臨があるのではあるまい乎。私は在ると信ずる。私の短き信仰的生涯に於ても斯かる降臨が幾度となく私相應にあつたと信ずる。耻を忍んで弱者の爲に盡す時に、神の愛に勵されて少許りの隱れたる善を爲す時に、殊に自分は別に罪を犯したりと思ふ覺えなき時に、或は他人の爲に或は同胞の爲に、或は祖先遺傳の爲に、彼等に代りて苦しみを受くる時に、而して苦しみて呟かず、我を鞭ち給ふ父の聖名を頌讃ふる時に、靜かなる鴿の如き聖靈の降臨を實驗した事があると信ずる。

是に由て觀れば人はバプテスマの式に依て救はるゝのではない。之を受けし精神に依て救はるゝのである。バプテスマの式はどうでも可い。キリストの精神を以て人生に對する、それが本當のバプテスマである。

第四回　野の試誘（上）

馬可傳一章十二、十三節。馬太傳四章一—十一節。路加傳四章一—十三節。

他の福音書に較べて馬可傳の特徴は第一に順序的なる事、第二に簡潔にして寫實的なる事である。其事は最も明白に野の試誘の記事に於て現はる。イエスはバプテスマをヨハネより受けて新たに聖靈と能力を授かり給うた。そして其後直に彼に臨みし者が野の試誘であつた。「斯くて御靈直にイエスを荒野に逐

ひやる」とあるが如し。能力が加はりて後に試誘、其れがイエスの場合に於て順序であつた。すべての人の場合に於てさうである。此順序其物が大なる眞理を我等に傳へる。

馬可傳の記事は簡潔である。故に之を補ふに他の福音書の記事を以てするの必要がある。そして馬太傳の記事は路加傳の記事と其要點に於て一致する。只試誘の順序に於て、馬太傳が第二として錄す者を路加傳は第三として掲げる。そして此順序の變化に由て試誘の意義に多少の變化を生ずる事に就ては、後に至て述べようと思ふ。私は茲に三福音書の記事を綜合して、イエスの御生涯に於て最も重大なる此出來事に就て成るべく丈け精細に考へて見やうと思ふ。

ドストエフスキーが曾て言うた事がある、若し試にイエスの言行に關はる記事が盡く消滅せらるゝとも、若し荒野の試誘の記事が殘るならば、基督教は世に存るであらうと。卽ち野の試誘是れ基督教であると見ても差支ないとの事で

ある。又詩人ミルトンが『樂園の回復』を歌ふに方て彼は野の試誘以外に渉る
の必要を感じなかつた。彼に取りても亦野の試誘は基督教のすべてあつた。イ
エスは之を以て世に勝ち惡魔を滅し給うたと信じたのである。序に曰ふが私の
知る範圍に於てミルトンの『樂園の回復』は野の試誘に關する最大最良の註解
である。其文の莊高優美なるは言ふに及ばず、其信仰は英國清教徒の信仰の最
高潮に達した者であつて、多分此場合に於けるイエスの心理狀態を最も正確に
窺うたものであると思ふ。

先づ馬可傳の記事に就て述べんに、「直に」とは前に言うた通りである。「御
靈イエスを逐ひやる」とは種々に解する事が出來る。イエスは自身好んで荒野
に入り給うたのでない。聖父の靈に强ひられて他動的に往き給うたのである。
外部の壓迫を云うたのである乎、又は內心の刺戟を指したのである乎、勿論知
る事は出來ない。彼が此時大問題に遭遇して其の解決を得んが爲に人を避けて

聖父とのみ共に在らん事を求め給うた事は確である。或人が言うた事がある
「イスラエルの歷史は荒野を離れて考ふべからず」と。荒野は實にイスラエルの
偉人の養成所であつた。モーセもエリヤもアモスもバプテマスのヨハネも其他
すべて親しく神と交はりし者、深く人生に就て考へし者は荒野に之を探ぐるが
恒であつた。誠に荒野は生產的には無用の地であるか、信仰的には最も有用の
域である。エルサレムより東南數十哩に渉り、急傾斜をなして死海に下る所、
是れ所謂「ユダの荒野」であつて、神が己を探ぐる者の爲に備へ給ひし天然の
修道院であつた。貴きは磽确不毛無人の地なる荒野である。

「聖靈イエスを荒野に逐ひやる」と云ふ。神の靈亦度々イエスの弟子を荒野に
逐ひやり給ふ。或は大責任を彼に擔はせ、或は大思想を彼に與へ、或は大疑問
を彼の衷に起して、彼をして止むを得ず寂寞の內に光明を探らしめ給ふ。荒野
は時には深山である、沙漠である。或は人の作りし修道院である。而して亦山

に退かずとも、又は寺に隱れずとも、心の內に荒野を作られて、身は都會雜沓の地に在ると雖も、靈は荒野に彷徨て惡魔に試みらるるのである。基督信者は誰でも一度は必ず荒野に逐ひやられるのである。

其時彼は何となく不安に感ずる。人生が懲らなくなる。恐れる。戰慄く。眞暗になる。其時種々の囁が心の耳に聞える。實に彼に取り人生の危機である。私は偉人の傳記を讀み、事の玆に至る時、彼の將來に就て大なる疑懼を懷かざるを得ない。荒野の試誘—彼にも有つたとカアライルは彼の『衣服哲學』に於て曰うて居る。ワルヅワスにも有つた事は彼の名作『序言』に明かである。「貴女は私は今何處に居る乎を知る。私は今メセクに宿る。メセクは長引くを意味すると云ふ。私は又ケダルに居る。ケダルは暗黑の意であると云ふ」と彼の從妹に書贈りしクロムウエルはたしかに此時荒野に居つたのである。我等はすべて各自一度は荒野に逐ひやられるのであると知つて、孤獨寂寞を感ずると雖も決

して失望してならない。

「荒野にて四十日の間サタンに試みられ、獸と共に居たまふ」とある。モーセがヱホバと共に四十日四十夜シナイの山の巔に於て在りしが如くに、イエスも亦此所に四十日惡魔に試みられて荒野に居つたのである。然し「サタンに試みられ」とは何の事である乎。罪あればこそ惡魔に試みられるのである。イエスが試みられたりとあるは彼も亦罪人であつた證據ではない乎と云ふ者がある。之に對し私は後に答ふる所あらんと欲する。今は唯希伯來書第四章十五節以下を引用するを以て足れりとする。曰く「我等の荏弱を思ひやること能はざる祭司の長は我等に有らず、彼はすべての事に於て我等の如くに誘はれたれども罪を犯さざりき。是故に我等憐愍を受け機に合ふ助けとなる恩惠を受けん爲に憚らずして恩寵の座に來るべし」と。自身罪なきに罪の赦しのバプテスマを受けしイエスは、罪人に同情を寄せん爲にサタンに試みられ給うたと云ふのである。

彼は自から試みられて、試みらるる事の何たる乎を知り給ひ又試みに勝つの途を示し給うた。彼は如何に試みられて如何に勝ち給ひし乎は他の福音書の示す所である。私は順に従ひて其事を説明しようと思ふ。

「獣と共に居給ふ」とは何である乎。荒野に棲息せし野獣と共に居給へりと云ふ事である乎。若しさうであるとすれば、獅子がダニエルを傷けざりしやうに、ユダの荒野特産の獅子や熊や蝎や蝮が柔和なる聖きイエスに何等の害を加へなかつたと云ふ事であらう。或は「獣」とはサタンの種々の現化ではなかつたらう乎。事は宗教心理學の領分に屬することであつて、單に之を物理的にのみ説明すべきでない。そして荒野が荒野に非ざる場合に於て、獣も亦獣でないのである。クロムウエルの如くに長引くメセクの地に暗黒のケダルの幕屋の内に宿る時に、我等は獣の如き人又は獣より悪しき人等と偕に居るべく餘儀なくせらるるのである。試誘の辛さは荒野に在り、又荒野の獣に在るのである。彼等は我

等を嘲けり、罵り、僞はりて様々の悪しき事を言ふ。然れども天の父の許なくして寸毫たりとも我等を傷くる事が出來ない。

荒野に在りてサタンに試みられ獣と偕に居ると云ふ。すべてが暗黒である。すべてが悽愴である。然れども「御使たち之れに事へぬ」とある。茲に光明がある。歡喜がある。天使は美はしき形を以てイエスの目に見えたであらう乎。或は靜かなる細き聲として彼に囁くに止まつたであらう乎。是れ亦私の知る所でない。然し乍ら形の問題でない、事實の問題である。神は御自分を愛する者を御使たちを遣して守り給ふと云ふのである。そして其事はイエスの此場合に於て事實であつた。多くの聖徒の場合に於て事實である。基督者には人の知らない味方がある。サタンが其全軍を率ゐて彼を攻め、社會にも教會にも亦彼の同志と稱する者の内にも一人の同情者なき時にも、御使たちは彼を護り、神命一たび降れば助けて彼をして安全ならしむ。馬可傳の記事にイエスが如何にし

てサタンを撃退し給ひし乎其事は書いてない。然し乍ら天使が彼に事へたとあつて、我等はサタンの試誘は全然失敗に終つた事を知るのである。記事は甚だ簡短である。然れども大家の筆に成りし繪の如くに、一點一畫悉く要點を描いて眞相の目前に躍如たるを見る。

「天使たち彼に事ふ」とある。天使は時には嬰兒である。其微笑に天父の愛が讀まれて憂愁の惡魔の散ずるを見る。或は預言者エリヤを助けしが如き貧しき寡婦である。彼女の信仰に懷疑の雲は晴る。天使は何處にも居る。

第五回　野の試誘（中）

馬太傳四章一—十一節。

イエスの野の試みを研究するに方て二三の先決問題がある。其一は人は果し

て四十日間斷食し得る乎である。其二はサタンなる者は果して實在する乎である。第三は奇跡は果して行はれし乎である。然し今は是等の問題を研究する場合でない。我等は聖書の記事其儘を事實として受けて、目前の研究に取掛るべきである。

試みは凡ての人に臨むが、人に臨む試みは其人に由て違ふ。青年には青年の大人には大人の、老人には老人の、男には男の、女には女の試みが臨む。そしてイエスにはイエス相應の試みが臨んだのである。所謂「野の試み」はイエスの試みとして臨んだのであつて、我等は先づ之をイエス特有の試みとして研究すべきである。而して後に其内に試みの通有性を發見して、之を我等各自に臨む試みに適用して機に合ふ教訓に與るべきである。

イエスはヨハネのバプテスマを受けて水より上りし時に「此は我が心に適ふ我が愛子なり」との天よりの聲に接した。今日の言を以て云ふならば、彼は此時

確かに神の子たる事を自覺したのである。然るに惡魔は此聲を打消さんとしたのである。是が試みの要點である。イエスは天よりの聲を信ずるや否や。其事を試みられんが爲に、彼は荒野に逐ひやられたのである。故に惡魔は先づ第一に曰うたのである「汝若し神の子ならば此石をパンと爲よ」と。「汝若し神の子ならば……」「若し」は疑ひの言である。イエスは確かに「汝は我が愛子なり」との神の言に接した。然るに惡魔は彼に疑を懷かしめんと欲して「汝若し神の子ならば」との語を以て言ひ掛けた。而かも要點は食物問題にある乎の如くに見せかけて、イエスの注意を他に惹かんとした。其巧みや實に驚くべきである。「汝若し神の子ならば此石をパンに爲よ」と。餓を充たすは惡事に非ず、イエスに今や石をパンに爲すの能力が在つた。彼は今何故に此能力を用ひて、パンを作り彼の貴重なる生命を保存せざる。然れどもイエスは直に惡魔の暗示の眞意を看破し給うた。是は彼の生命を助けんとの助言ではない。之を毀たん事は彼

れ惡魔の最大の希望である。惡魔の目的はイエスが神の命を待たずして、惡魔の言に耳を傾けて、彼をして茲に正當の理由ある奇蹟を行はしめ神とイエスとを離間せんとするに在つた。故にイエスは之に答へて曰ひ給うた「人はパンのみを以て生くるに非ず、神の口より出る凡ての言に由る」と。(「惟神の口より」と舊譯にある「惟」の字を除くべし)。イエスは茲に舊約聖書申命記八章三節の言を引いて答へ給うたのである。其の意味は普通に解せらるゝが如く「人は肉體を養ふパンのみを以て生くるに非ず、靈魂を養ふ神の言を以て生く」と云ふ事でない。イエスの此言の意味は「人はパンを以て生くるがパン丈けで生くるのではない、神の口より出る凡の言、卽ち神の命に由て與へられたるパンを以て生くるのである」と云ふのである。パンはパンでさへあれば其出所を問はず、其の之を得る方法を問はず、パンは道德問題又は信仰問題を離れて考ふべきであると云ふ世間普通の考へに對して、イエスは此言を發し給うたのである。イエ

スは此時飢えて非常にパンを要求し給うた。そして彼に亦之を造るの能力があつた。然れども神の口より出る言を聞かずして此能力を使用する事は出來ない。神の許し給はざるパンを食ふは餓死するに若かずと彼は堅く立つて動き給はなかつた。要は神に對し子たるの關係を維持するにあつた。神の敵なる惡魔の言とあれば縱令正當の理由ある者と雖も斷然之を斥くるにあつた。神との聖き關係を保つ爲に惡魔との關係を斷つにあつた。「汝は我が愛子なり」との神の言を信じて動かざらんが爲にイエスは玆に餓死を決心し給うたのである。

惡魔は第一の試みに於て失敗した。故に第二の試みを試みた。彼はイエスをエルサレムに携へ行き、聖殿の頂上に立たせて曰うた「汝若し神の子ならば己が身を下に投げよ云々」と。其目的は前回と同じく、天よりの聲に對し疑を懷かしめ、父と子とを離間せんとするに在つた。然し目的は同じであつたが方法は異つた。前にはイエスをして己の能力を試さしめんとしたが、今は彼に對す

る父の愛を試さしめんとした。此場合に於て試みは父の愛の試みであつた。そして是れ亦正當の試みであるまい乎。イエスは神の愛子であると云ふ。然し此事を傳へし者は聲たるに過ぎない。聲に誤りなしとせず、聲は其事實を試みるの必要あるに非ずやと惡魔は玆にイエスに囁いたのである。聖書は錄すに非ずや、汝若し高き所より落ちん時、神は天使を遣りて汝の身を支へ、汝をして石の上に落つるも無難ならしめ給ふと。聖書の此言を實驗的に試みて然る後に救世の途に就く、是れ志を固め、確信を以て働くの途に非ずやと云ひて、惡魔はイエスの大業を翼賛するが如くに見せかけて、彼に冒險を促したのである。

然れどもイエスの之に對する答も亦明白であつた。惡魔は詩篇九十一篇十一節に依りてイエスを誘ひしが、イエスは申命記六章十六節を以て之に答へ給うた。曰く「主たる汝の神を試むべからず」と。其意味は「神は其言に由りて信ずべし、之を試むるの必要なし、神の言を聞けば足る、奇蹟と休徵を見るにあら

ざれば信ぜずと云ふは、是れ不信なり、罪なり」と云ふのである。イエスは既に明かに天よりの聲を聞き給うた。其事實を試すに及ばず。人間の場合に於てすら其言を信ぜずして其證據として實物を要求するは無禮である。況して神に對してをや。親しき家庭の關係はすべて信用に由て維持せらる。然るに神の子が父なる神の言を信ずる能はずして、其證據を奇蹟に求むるに至る、玆に三位の聖き關係が其一方に於て破れるのであつて、イエスに取りては此上なき重大事件である。イエスの聖眼（烱眼と云はず）能く惡魔の謀計を見拔き給うた。故に一言以て之を喝破し給うた。

惡魔はイエスを試みて二度失敗した。彼はイエスの神に對する子たるの態度を少しも動かす事の出來ない事に氣附いた。玆に於てか全然手段方法を變へてイエスに臨んだ。惡魔はイエスに曰うた「汝の神の子たる事、イスラエルの王キリストなる事を我は認む。而して我も亦世界萬民と共に汝の大業の成らん事

を願ふ。然れども事は難事である。而して民は塗炭に困んで一日も早く救はれん事を望んで止まず。善は急げ。汝の場合に於て成功一日の遲滯は萬邦百年の災厄に當る。何ぞ少しく我を利用して汝の成功を早めざる。短時日の間に國を救ひ世を治むるは政治に由るに若かず。汝の天職と才能とを以てしてイスラエルを率ゐて世界を統御するは易々たるべし。見よ全世界は汝の蹶起を待つに非ずや。先づ兵力、外交、內治を以て世界を統一して然る後に汝の救世的事業を行ふ。是れ最も早く、又最も容易く世を救ふの道に非ずや。たゞ少しく我に聽き、我を重じ、我を用ふれば足る。汝、我が此提言を採用せずや」と。

イエスは惡魔の此囁きを聞きて別に之に答ふるの必要はなかつた。惡魔は玆に惡魔たるの正體を現はした。一言之を叱咤すれば足る。「サタンよ退け。主たる汝の神を拜し唯之にのみ事ふべしと錄されたるに非ずや」と。神の國を建設するに方て惡魔の力は寸毫之を藉るに及ばず、只神の力、卽ち義と愛とを以

てのみ行ふべし。時は縱し長くかゝるとも、道は縱し遠くして難くとも、神の國は神の示し給ふ道に由てのみ建つる事が出來る。前にはネブカドネザル、アレキサンドル、シーザー、後にはシャーレマン、ナポレオン、カイザルの取りし途、是はサタンの示す道にして誤りたる途である。イエスは神の子にして、寸毫惡魔の途卽ち此世の途に由らずして神の國の建設を始め給うた。嗚呼聖き偉大なるイエスよ、若し汝の弟子と稱する者が悉く汝の取り給ひし道を取り來りしならば、世は今頃は既に神の國と成つたであらう。然るに事實は之と正反對である。基督敎會と稱する者は此世卽ちサタンの道を取りて世界敎化を計りつゝある。憤慨何ぞ堪えん。

第六回　野の試誘(下)

路加傳四章一—十三節。

所謂「荒野の試誘」は神の子イエスキリストに臨みし試誘であつた。故に之に普通の人に臨む試誘がなかつた。惡魔はイエスの利欲に訴へて彼を試みなかつた。斯く爲すも無益であると知つたからである。惡魔は亦イエスの情欲に訴へなかつた。是れ特に注意を要する事である。大抵の人の場合に於て「試誘」と云へば情欲の試みを云ふ。釋迦牟尼の場合に於てすら試みは此形を取つたと記されて居る。惡魔は美人の形を取つて聖者に顯はれたとは凡て名僧聖人傳の錄す所である。然るにイエスの場合に於ては此試みがなかつた。彼は此試誘を以て試みらるゝには餘りに聖くあつた。ミルトンの『樂園の囘復』に魔界の王

サタンがイエス誘惑の方法に就き、魔族の意見を叩きし時に、色魔ベリアルは助言を提して曰うた「彼の眼に婦人を示せよ。彼の行く所に婦人を据よ。人の子の内に最も美しき婦人を求めて之を彼の前に置けよ」と。然るにサタンはイエスの場合に於て此の方法の全然無效に終るを說いた。イエスの目的は餘りに高く、彼の眼は餘りに聖くして、彼は到底情欲の誘惑を以て近づくべからざるを陳べた。そしてサタンをして此陳述を爲さしめしミルトンは能く主イエスの心を知つたのである。其點に於て佛人ルナンが其小說的イエス傳に於て、イエスをしてナザレに殘せし彼の戀人を懷はしめし一段は、小說とは云へ、能く著者自身の心理狀態を暴露し、信仰の事に於て佛國文豪の到底英國詩人に及ばざるを示して餘りあるのである。

イエスに低い卑しい情は無つた。然し乍ら彼に高い貴い情は有つた。彼は婦人の內に愛人を持ち給はなかつたが、彼には婦人以上の愛人があつた。それは

神の民であつた。神に選ばれし人の子等であつた。彼は彼等を思ふこと熱く、彼等に惹かれ、彼等の救拯の爲に動かされた。如何にして彼等を救はん乎。其手段方法如何。此問題を心に藏して彼は荒野に往いたのである。そして路加傳のイエスの野の試誘に關する記事は此方面より見たる記事であると思ふ。イエスの心を占領せし者は唯二つであつた。其第一は神に對する愛であつた。其第二は神の民に對する愛であつた。そして野の試みをイエスの神に對する愛の試みと見た者が馬太傳の見方である。人、殊に神の民に對する愛の試みと見た者が路加傳の見方であると思ふ。勿論同一の試みが同一時にイエスの愛の兩方面に訴へたのであるが、兩傳の著者は各自己に最も强く訴へた方面を記錄したのであると思ふ。

イエスは餓え給うた。そして餓え給ひしと同時に感じ給ひし事は飢餓の苦痛と食物の要求とであつた。惡魔は其時イエスの心裏に囁いて曰うたのである。

「汝神の子たるの能力を以て石を化してパンと成し、先づ汝自身の飢を癒し、然る後にすべて汝の民を養うては如何。人生最大の問題は食物問題である。先づ民を養はずして何事も始まらず。見よ世に飢餓に苦しむ民の如何に多きを。餓えたる民に良政を施す能はず餓えたる民は福音を聞く爲の耳を有せず。食物に豊富ならずして順良高徳の民あるなし。故に汝若し神の子ならば茲に意を決して食物の供給者となれよ。是れ最も實際的の意味に於ての世の救主たる事なりと。そして斯かる誘惑は愛情鋭敏なりしイエスを強く動かしたに相違ない。空の鳥の養はるゝを見て喜び給ひし彼は、人の子の食物足らずして苦しむを見て如何計り苦み給ひしよ。然れども彼の深き愛は淺き愛に勝った。彼は聖書の言を思出し給うた「人はパンのみにて生る者に非ず」と。パンは確に必要である。然し乍ら人はパン丈けにて生る者に非ず。パン以外に獨ほ多くの必要物がある。政治も必要である。思想も必要である。殊に神を知るの知識は最も必要である。

人各自其天職あり。食を民に給するの業は之を他人に讓らん。我は神の子として、天の父を人に示し、彼の義と愛とを世に傳へて、永遠に生くるに必要なる生命のパンとなりて終らんと。イエスは大略如斯くに曰ひて惡魔の此誘惑を擊退し給うたのであらう。

茲に於て惡魔は第二の救世手段をイエスに提言したのである。卽ち大政治家となりて世を救へと云うたのである。政治必しも惡事に非ず。世に神聖なる政治なきに非ず。ダビデ王自身が大軍人であつて同時に大政治家であつた。イエスは何故に神が「我が心に適ふダビデ」と稱び給ひし彼の大なる祖先ダビデに倣ひて王たらざる乎。世を救ふの捷徑は王たるに在り。前には彼斯王クロス、バビロンを滅し、世界に王たりて神の民を救ひ、良き平和を廣き國土に施した。イエスは何故に、神が預言者を以て「彼は我が牧者すべて我が好む所を成らしむる者なり」と曰ひ給ひしクロス王に倣ひ、より大なるクロスとなりて萬民を

救はざる（以賽亞書四十四章廿八節）。世の所謂政治家の野心を離れて、神の政事を世に施して民を救はんとの心の、時にイエスに起つたことは疑ひない事である。

然し乍ら政治は政治であつて此世の事である。循つて文字通りに惡魔を伏拜むには及ばずとするも、彼を利用するは免かる能はざる所である。最も神聖なる政治家と雖も此意味に於て或種の罪を犯さずして功を遂げ名を擧げたる例は無い。縱し又完全なる政治を行ひ得るとするも、政治は民を其外部に於て救ふに止まり、其内心を潔むるに至らない。心に奴隷の民たる者は、縱し政治的に自由たるも、尙ほ依然として故の奴隷の民である。神の子は惡魔と何等の關係なき途に由り、人の衷なる靈魂の深き所に福祉と自由とを與へざるべからず。イエスは人類の靈魂の王たらんが爲に、茲に亦世界の王たれとの惡魔の囁を打消し給うたのである。

然らば靈魂の王たらんと欲して其途如何は次に起る問題である。そして此途に就て又惡魔はイエスに示す所があつた。彼を「エルサレムに携れ往き聖殿の頂に立せて曰ひけるは云々」とあるは惡魔がイエスに示せし傳道法を錄した言である。卽ち民衆注視の間に、殊に祭司、長老、民の學者等の前に於て奇蹟を行ひ、彼等を驚かし、彼等の心志を奪ひ、彼等をして彼に跪伏せざるを得ざるに至らしめて然る後に彼等に道を說く、是れ彼等の靈魂を救はんが爲に最も有力にして確實なる途であると、惡魔はイエスに敎へたのである。然し乍らイエスは亦此途を斥け給うた。是れ神を試むる途であると知り給うたからである。神を試むるとは神を惱まし奉る事である。申命記六章十六節に「汝マッサに於て試みし如く汝の神エホバを試むる勿れ」とある其意味に於て神を試み奉る事である。卽ち救拯の奇蹟を神に迫りて彼の御心を惱まし奉る勿れとの訓誡である。イエスは茲に傳道用としての奇蹟を斷然排斥し給うたのである。

世を救ふの手段方法として惡魔はイエスに第一に慈善、第二に政治、第三に奇蹟を勸めた。然し乍ら何れも拒絶せられて此上彼に施すべき手段が無くなつた。茲に於て「惡魔是等の試誘をみな終りて暫く彼を離れたり」とある。然り「永久」にではない、「暫く」である。後にはまたペテロを以て、イスカリオテのユダを以て、最後には十字架の死を以て彼を試みた。然しイエスは最後まで勝ち給うた。イエスは弱き人類を救ふに方て其弱點に乘じ給はなかつた。却て人の强所に訴へて彼をして强からしめ給うた。イエスこそは本當の世の救主である。

慈善に由らず、政略を用ひず、奇蹟を以てせずして、イエスは何に由て世を救はんとし給ひし乎。單純なる神の言を以てしてゞある。そして之を證明するに御自分の生命を以てしてゞある。誠に「生命に入るの門は狹く其道は細し」である。惡魔の勸を盡く拒絶してイエスに殘るは唯一本の道であつた。卽ち十

字架の道であつた。神の言と之に印すに己が血を以てす、之より外に彼の取るべき救世の道はなかつた。偉大なるイエスよ。

第七回　傳道の開始

馬可傳一章十四、十五節。馬太傳四章十二—十七節。路加傳三章廿三節。同章十六—卅一節。

ヨハネの囚れし後イエス、ガリラヤに至り神の國の福音を傳へて曰ひけるは「期は滿り神の國は近けり、汝等悔改て福音を信ぜよ」と。

イエスは神の國の何たる乎、之を宣傳ふる方法如何を野の試誘に由て確め給うた。神の國とは人が神に對し子たるの關係を維持する事である。此事を言に表はしたる者が福音である。此事を世に傳ふるが傳道である。福音は簡短、之

を宣傳ふる途も亦簡短、大眞理はすべて簡短である。眞理中の最大眞理たるイエスの福音は最も簡短である。唯之を信じ、之を行ひ、之を他に傳ふるに強き決心が要るのみである。思想が簡短に成るまでは活動は始まらない。其點に於てニュートンもアインスタインも、ルーテルもカントも皆同じである。そしてイエスは「神は我父、我は我が生命を賭して此關係を維持すべし」との簡短極まる思想に達して今や起たざるを得なかつたのである。

路加傳の記事に從へば「時にイエス年凡そ三十にして福音を宣べ始む」とある。人の三十歳は彼の自覺の時期である。肉體が其發達を遂ぐるも此時、意氣が其旺盛を極むるも亦此期である。神の子も人として生れ給ひて人の取る常道に倣ひ給うた。世には三十歳以下にして大事を成就た人が無いではない。歴山王は二十二歳にして歐亞征服の途に就いた。ウィリヤム・ピットは二十四歳にして英帝國の總理大臣と成つた。然れども是れ皆例外である。神の子は齡三十

に達するまでは世に現はれ給はなかつた。今は時なりと自から定めて、身心共に熟せざるに社會教化の途に就く者はイエスに學ぶ所なかるべからず。早くも三十歳、四十歳に達するも遲からず。神の命を待つて起つ。準備は充分なるを要す。福音の眞髄を解し、惡魔を先づ己が心の裏に征服し、然る後救世の途に就く。神の子の取り給ひし途は我等の取るべき途であらねばならぬ。米國人の勸言に從ひ「王の事は急なるを要す」とのサムエル前書廿一章八節に於ける人なる王に就て曰へる言を引いて、之を神なる王に應用して、彼が招き給はざるに彼の御事業に就きてはならない。

「ヨハネの囚れし後」イエスはガリラヤに於て傳道を始め給へりと云ふ。此はイエスがヨハネの例を恐れ、ユダヤを避けてガリラヤに退いたのであると解する註解者がある。然し私はさう思はない。イエスのガリラヤ傳道は彼の主義に依つたのである。ヨハネの投獄はイエスの傳道開始を促したのであつて、其方

針を變へしめたのでない。ヨハネはガリラヤの分封の君ヘロデの囚ふる所となりて、彼がイエスの紹介者、其先驅者たるの天職を終へたのである。而して福音宣傳は中絶を許さず、先陣斃れて後陣之に代つたのである。ヨハネ囚はれてイエス起ち給ふ。福音宣傳は勇者の從事すべき事業である。徒らに時勢に省み、危險は成るべく之れを避け、水の低きに就くが如くに成るべく抵抗尠き途を取る。是れ近代傳道師の爲す所なりと雖も、主イエスの爲し給ひし所でない。英國人の阿弗利加傳道に、一人のハンニングトン斃れて數人の彼に代る者ありしが如きが本當の基督教傳道である。「ヨハネの囚はれし後イエス、ガリラヤに到り神の國の福音を宣傳ふ」とある。我が殪れし後我に代りて起つ者は誰ぞ。

イエスは傳道をガリラヤに於て始め給うた。エルサレムに於て始め給はなかつた。彼の能力を以てして直に効果最も多き中央傳道を開始し得ざりし理由はない。然れども是れ彼の選び給ひし途でなかつた。彼は田舍傳道を以て始め給

うた。ガリラヤに始め給うた。而かも其首府たるチベリオに於てにあらず、小都會たるカペナウムに於て始め給うた。そして是が本當の順序である。諺に曰く「神は田舍を造り、惡魔は都會を作る」と。我等田舍傳道の經驗を有ちし者はすべて知る、最も確實なる信仰は田舍に起て都會に起らざる事を。イエスの世界教化が「ガリラヤより何の善きもの出んや」と云はれし其ガリラヤより始まりしを知て、我等も亦中央傳道と稱して多くを之より望み、過大の重きを之に置いてはならない。

そしてイエスの傳道は福音卽ち神の御言の宣傳を以て始つた。奇蹟を以て始らなかつた。福音の要部は御言である。奇蹟は其附添たるに過ぎない。イエスは其傳道に於て決して奇蹟を重要視し給はなかつた。彼は惡魔の誘ひに從ひ、先づ奇蹟を行ひて人の注意を惹き、後に彼等に道を說き給はなかつた。「時は滿てり、神の國は近づけり、汝等悔改めて福音を信ぜよ」と。是がイエスの傳

道の眞髓である。「悔改めて福音を信ぜよ」。神に對して反逆の罪を繼け來りし態度を改めて、天の父は汝の歸り來るを待ち受け給ふとの言を信ぜよと。是が福音の眞髓である。

「時は滿てり」。人類が世に現はれてより長い時があつた。人類學者は云ふ多分今より二十萬年前であつたらうと。舊石器時代に既に神を探るの兆候が現はれた。エジプト、ギリシヤ、バビロンと長い時代が續いた。そしてイスラエルの間に在りて、神は昔多くの區別をなし多くの方法をもて預言者たちにより先祖たちに告げ給ひしが、終にこの末日に於て其子に託りて語り給うた（ヘブライ書一章一、二節）。人類發達の極は人が神に對し子たるを自覺する事である。そして此自覺が最も鮮にイエスに於て現はれた。詩人ゲーテが曰ひし通りに、人類の發達は如何なる程度に達するも、其道德的優秀の點に於てイエス以上に達する事は出來ない。イエスが其福音を齎してガリラヤ湖畔に傳道を開始し給

ひし時に、人類の到達すべき最高巔が見えて、神の國は地上に臨んだのである。事は後に到りて明かである。

「神の國は近けり」。神を父として有つ心、其れが神の國である。イエスに此心が有つた。惡魔はイエスの此心を動かさんと欲して反て彼の確信を强めた。死すとも父の命に順ふべし、父の言を試みんとて奇蹟を要求せざるべし、惡魔の途は一切取らざるべしとの決心ありて、神の國は既にイエスの心に臨んだのである。故にイエスに在りては神の國は近づいたのではない、既に臨んだのである。彼は己が衷に神の國を齎して世に臨み給うたのである。

神の國はイエスに於て在つた。そしてイエスを以て世に近づきつゝあつた。後に彼が「神の國は顯はれて來る者に非ず、此所に見よ彼所に見よといふべき者に非ず、神の國は汝等の內に在り」と云ひ給ひしは此事を意うたのである。（路加傳十七章廿、廿一節）。「汝等の內」とは「心の內」と云ふ事ではない。

「汝等の間」と云ふ事である。神の國はイエスを以てパリサイの人等の間に在つたのである。彼等は悔改めて卽ち心を變へて、彼の言を信ずれば、それで神の國は彼等にも亦臨んだのである。

そして今日の我等に取つても神の國は近くあるのである。今や神の國は肉體となりて顯はれし神の子を以て我等の間に在らずして、神の言なる聖書として我等の手の內に在る。其內に神の國は明かに示して在る。取て以て我有となす事が出來る。イエスの野の試誘(こゝろみ)は明かに神の國の何たる乎を我等に示した。然し其れ丈けでは足りない。試みは惡魔に對する試みであつて、主として神の國の消極的方面を示した。今より後我等は其積極的方面を窺ふであらう。然し何れの方面より見るも神の國はイエスを離れてはない。イエス卽ち神の國である。

「悔改」は新約聖書中の深い辭(ことば)である。單(たゞ)に罪を悔いて之を改むる事でない。原語の metanoia(メタノイア) は心意一變の意味である。人生觀の一變と解して間違がなか

らう。イエスの御父なる眞(まこと)の神を識らずして人生觀全部が誤つて居るのである。故に心を變へて福音を信ぜよと云ふは、福音を信じて心を變へよと云ふと同じである。イエスは萬物の見方を一變せよと敎へ給うた。彼は單に心(ハート)を新たにせよとのみ敎へ給はなかつた。萬物の見方卽ち意(マインド)を變へよと告げ給うた。玆に於て所謂「悔改」は單に情の事でなく又知識の事である事が判明る。悔改は萬物を見る心眼の一新である。「福音を信ぜよ」。神の御心を現はしたる其言を信ぜよ。神が萬物を觀たまふ其見方を以て觀よ。神と心意を共にする者となれよ。

第八回　弟子の選擇

馬可傳一章十六—二十節。馬太傳四章十八—廿二節。
參考　路加傳五章一—十一節。約翰傳一章卅五—五十一節。

神の國は宣言せられて將さに建設せられんとす。イエスは其保有者であり又其建設者であつた。そして此場合に於て國の建設者が其王であつた。神の國は臣下の援助に依てに非ず王一人を以て始つた者である。神の國は初めより共和國に非ず王國である。其建設も維持も完成も王一人の能力(ちから)に因る。佛國の大王ルイ第十四世は「國家卽ち朕なり」と云うたが、此言は其嚴密なる意味に於て唯神子イエス一人のみに當篏(あてはめ)る者である。神の國卽ちイエスである。此事が解らずして基督敎は解らない。

王は其臣下を選びて之を召し給うた。そして第一に其選擇に與つた者が二對(つる)の兄弟であつた。第一對はシモン(ペテロ)と其兄弟(多分兄)アンデレ、第二對はヤコブと其兄弟(多分弟)ヨハネであつた。イエスは唯彼等に命じて曰ひ給うた「我に從へ」と。そして其聲に應じて「彼等直に之に從へり」とある。茲に唯命令に對する服從があつたのである。主權者と市民との間に協約が成立したのではない。又は弟子が師の門に入りて師弟の關係を結んだのではない。王が其至上權を以て臣を召して、臣は其服役に就いたのである。如斯くにしてイエスは國の王として無類の王である。人の師として無類の師である。イエスは單に我等の支配人でない。又先生でない。神の子にして受膏者キリストである。彼を人として見る時は彼は最大の壓制家である。神の子としてのみ見て彼の至大の權能を承認する事が出來る。

そして基督(クリスチヤン)者は凡て此權能を以てキリストに選ばれ又召されたる者である。

「汝等我を選ばず我れ汝等を選べり」と彼が言ひ給ひし其言は信者何人にも當嵌る者である（約翰傳十五章十六節）。そして神の子に選ばれて何人も辭退する事は出來ない。恰かも天皇陛下の召集を受けて日本臣民何人も之を拒む事が出來ないと同然である。そしてイエスに召さるゝは最大の名譽又幸福である。彼に召されてガラリヤ湖の漁夫は人類の敎師、世界の改造者となつた。然れども世人はさう思はないのである。イエスに召さるゝは貧に居り、恥を忍び、惡戰苦鬪の間に一生を送る事であるとのみ彼等は思ふ。彼等イエスの臣下たるの患苦をのみ見て其榮光を知らないのである。イエスに召されん乎、我等も亦稼業を棄、然り日本臣民が陛下の召集に接して家を棄て國家の難に赴くが如くに、我等も亦すべてを棄てゝイエスの聖召に應ずべきである。

イエスは如何なる階級より其弟子を選び給ひし乎。イスラエルの師は所謂有望の學生の間より其弟子を選んだ。ガマリエルの門下にタルソのサウロが有り

し如きが其一例である。日本が貴族國であるやうに、イスラエルは祭司國であつた。故にイスラエルの師たる者は其弟子を祭司階級又は之に從屬する者の內より選ぶを常とした。然れどもイエスは全く其敎を異にした。故に全く異なりたる階級より其弟子を選び給うた。彼は後に敎へて曰ひ給うた「新しき葡萄酒を舊き革囊に入るゝ者あらじ、若し然せば新しき葡萄酒はその囊を破裂きて葡萄酒洩れ出で革囊も亦壞るべし。新しき葡萄酒は新しき革囊に盛るべき也」と（二章廿二節）。イエスの敎卽ち福音は新しき葡萄酒であれば、之は舊き革囊なる祭司、パリサイの人、民の學者等に注入すべき者に非ず。若し然せば福音はその囊を破裂き、福音は失せ之を授かりし人々も亦亡びるであらう。福音は福音に相當する器に注込ねばならぬ。そして其器は所謂宗敎家に非ず、神學者聖書學者と云ふが如き類に非ず、漁夫を以て代表されたる勞働の子供であるとは、最初の弟子選擇に關する記事が明に示す敎訓である。イエスは其弟子を選ぶに

方て之を博士、學士、書を讀むを以て最高の業なりと思ひし人等の間に探り給はずして、之をガラリヤ湖畔に漁業に從事せし漁夫の間に求め給うたと云ふのである。イエスが傳へ給ひし基督敎の何たる乎、彼が作り給ひし基督信者の如何なる者なりし乎は此一事に由て見て一目瞭然である。

眞理は眼を通してよりは手を通して入り易しとはフレーベル幼稚園敎育の原理である。そして神の子供は大となく小となくすべて最も善く手を通して敎へらる。讀書は眞理を知る道として決して最上の者でない。眞理は最も善く手を通うして、手を以て働いて、手を以て神の天然に觸れて知る事が出來る。是れ勞働に敎育上最大の價値ある理由である。殊に福音の眞理に於て然りとする。キリストの敎丈けは、書を讀んだ丈けでは解らない。神學校は決して最上の神學校ではない。最上の神學校は田園である。漁場である。神の指導の下に働く工場である。神は働いて知る事が出來る。讀んで、考へて、議論して解る者で

ない。イエスは其最初の弟子を勞働者の内より選び給うた。彼はフレーベル以上の敎育家であり給うた。故に彼の福音を主として勞働者に委ね給うた。キリストの敎は何の方面から見ても神學者、聖書學者、言語學者等の解し得る敎でない。誠に基督敎を最も甚だしく誤解し又曲解する者は是等の人々である。

イエスの最初の弟子は勞働者であつた。乍然彼等は今日所謂プロレタリアト卽ち無產階級の人でなかつた。ヤコブとヨハネとはイエスに召されて直に「其父ゼベダイを傭人と共に船に遺して彼に從へり」とある。傭人を使ひ舟を所有し得し彼等は決して單の勞働者ではなかつた。シモンも亦アンデレと共に一家を構へし人であつて、彼等も亦今日世に稱する勞働者ではなかつた。彼等は皆中流獨立の民であつた。富まず貧しからず自己の正直なる勞働に由て尊敬すべき生涯を送る者であつた。そしてイエス御自身が此地位に在る人であつて、彼は又其弟子を此階級より選び給うたのである。基督敎は其初めより特に中流階

級の宗教であつた。是れ今日に至るも、一方には貴族富豪に納れられず、他の一方に於ては過激派社會主義者に嫌はるゝ理由である。

イエスは漁者なるシモンとアンデレを見て言ひ給うた「我に從へ我れ汝等を人を漁る者と爲さん」と。私も青年時代には北海の漁者であつた。水産を起して我國富强の基を築かんとは私の青年時代の理想であつた。然るに私もペテロと同じくイエスに見出され、其召す所となつた。彼は私にも告げて曰ひ給うた「汝網と舟とを棄て我に從へ、我れ汝を人を漁る者と成さん」と。然し私はペテロの如くに直に彼に從ひ得なかつた。私はイエスの聲を私自身の聲であると思うた。故に永の間彼の命を拒み、何を爲しても人を漁る者と成るまじと努めた。然し乍ら彼の命は到底拒み難くあつた。イエスは遂々私を彼が欲ふが儘に成し給うた。そして今日此所に於て彼がガリラヤ湖畔カペナウムの町に於て傳へ給ひし喜びの音を私の國人に傳ふる者となつた。「父よ然り、それ此くなるは聖旨

に適へる也」である(馬太傳十一章廿六節)。然し乍ら「人を漁る者」と成りたればとて私は教會の牧師、傳道師とは成らなかつた。私の場合に於て「人を漁る」とは信者を作りて之を教會に收容する事ではない。「人を漁る」とは其本當の意味に於て人にイエスの言を傳へ彼を其忠實なる臣下又は弟子となす事である。私は此事業に召されし事を最上の喜び又最上の名譽なりと信ずる。そして人を漁る者と成りたればとて私は今日に至るも魚と之を漁る業を忘れない。魚と聞いて私の興味の振ひ起るを覺ゆ。ガラリヤ湖に二十二種の魚が蕃殖して、其内七種が、クローミス屬であつて阿弗利加ナイル系に屬する河湖に産する魚類であると知つて人の知らざる興味を感ずる。馬太傳十三章四十七、四十八節に魚に善き者と惡き者があつて、其善き者は以上のクローミス屬であつて、惡しき者とは我國の鯰の類であつて、其長さ時に五尺に達する者があると聞いて、身自からペテロ、ヨハネと共に網を湖水に打つが如くに感ずる。私は彼等と同じ

く會堂や神學校に於てに非ずして、海の畔に於てイエスに召されしことを最大の名譽又幸福なりと認むる。そして私のみでない、神が私を以て召き給ひし最も善き信者は海か畑に於て神を知つた者である。學校、殊に神學校は私に緣の遠い所である。

第九回　ガリラヤ湖畔の一日

馬可傳一章廿一—卅四節。馬太傳八章十四—十七節。
路加傳四章卅一—四十一節。

世に果して奇跡ありやとの質問に對し私は答へて言ふ「有り」と。見る眼を以て視れば萬物悉く奇跡である。自然其物が不思議である。鐵が不思議である。鉛が不思議である。地が不思議である。天が不思議である。我が存在其物が不

思議である。天然の法則と稱する者は人類の經驗を說明する爲の假定的法則に過ぎない。今や奇跡は有り得ないと云ふ者は寧ろ宗敎家又は神學者であつて、理學者又は天然學者でない。人類が天然に就て知る事は餘りに僅少である。此僅少なる知識に基いて、如何なる學者と雖も奇跡は有り得ないとの斷定を下す事は出來ない。

萬物は不思議である。之に併せて人の能力は無限である。「人は弱き者なり」と云ふは、罪を犯し神を離れたる人に就て云ふのであつて、罪を知らず能力の源なる神に繫がる人に就て云ふのでない。人は如何にして造られし乎は別問題として、人が人と成りし時に彼は超自然者と成つたのである。神に象り其の像の如く造られし人は神に似て自然を支配すべき者であつて、自然に支配せらるべき者ではない。天地萬物悉く不思議であるが、其內最も不思議なる者は人である。彼は神の子として造られたる者である。故に神に似て神の爲す事を爲し

得べき筈の者である。然るに事實如何と云ふに、人は神に似るよりもより多く獸に似て、神の子と稱するよりは寧ろ獸の子孫と稱すべき者である。然れども是れ人の天性が然らしむるに非ずして、彼の犯せし罪が然らしむるのであると聖書は明白に敎うるのである。罪を犯さゞる人、神が造り給ひし其儘の人、父の懷より出し神の子卽ち純淸なる人の能力は無限である。斯かる人は人心を支配し得るのみならず天然をも支配し得るのである。人は罪を犯して天性の能力を失うたのである。罪是れ能力の消滅者である。佛國革命史に於て偉人ミラボーが、勢力の絕頂に達して自己の能力の不足を歎じ、其壯年時代に於て身の淸潔を守り得ざりし事を痛く悔いて止まざりしとの一事は、以て此事を證明するに足る。「人の可能性は單に彼の肉體の健全と頭腦の强健とを以て計る事は出來ない。彼が其人格に於て聖き神の子と成るを得し時に、彼は本當の意味に於て萬物の靈長となり、一言以て病を癒し、一聲以て波を靜め得るのである。」

イエスは神の子として生れ、野の試誘に打勝ちて更に能力の供給に與つた。「イエス聖靈の能力を以てガリラヤに歸り」と路加傳は記して云ふ（四章十四節）。彼は自己に充溢れる此能力を以て傳道を始め給うた。先づ第一に四人の弟子を召して彼等をして聖業の目擊者又共働者たらしめ給うた。そして多分其次ぎの安息日に公然メシヤたるの御事業を始め給うたのであらう。朝はカペナウムのユダヤ人の會堂に入りて敎を爲し、其處に汚れたる鬼に憑れたる人ありたれば、權威の一言を以て其鬼を逐ひ出し給うた。其日の午後にはシモン、アンデレの家に至り、シモンの岳母の熱を病みて臥し居るを見たまひしや、彼れ彼女の手を取りて起したれば、熱直に去りて彼女は起て彼の一行を接待した。夕暮になりたれば人々すべての病を患へる者、鬼に憑れたる者をイエスに携へ來る。その邑こぞりて門に集り、彼れ多くの人々を醫し、又多くの鬼を逐出せりとある。實に忙はしき一日であつた。盛なる傳道の首途であつた。此事を最も生々

と畫いた者がレムブラントの作「キリスト病者を起し給ふ」である。見れば見る程其意味の深さが見取れる。何人も其一葉を室内に掲ぐべきである。

何の爲の奇跡であつた乎。勿論人を驚かす爲の奇跡でなかつた。若し然りとすればサタンの勸めに從つて、僻陬のカペナウムに於て爲さずして、首都のエルサレムに於て爲したであらう。又人心を收攬する爲の奇跡でなかつた。若し然りとすれば彼は其の廣く世に知られん事を求めたであらう。イエスの奇跡は自發的に彼の善意より出たる者である。彼に醫すの能力ありたれば、彼は病者を見て同情に堪へず、前後を忘れ、利害を顧みず、爲さんと欲する事を爲し給うたのである。是れすべての善人の爲す所であつて、別に教理的又は哲學的意義の其内に在つたのではない。普通の善人とイエスの異なる點は、不思議を行ふ能力の有無に在つて、善を行ふ動機に於ては二者何の異なる所はない。善を爲さんと欲するの心、是れすべての善人に在る所の者であつて、殊に著るしくイ

エスに於て在つたのである。「イエスは神より聖靈と能力を沃がれ周く遊りて善事を行ひたり」と後にペテロが言ひしが如くに、イエスは此日又人々に善事を行ひ給うたのである(行傳十章三十八節)。斯くしてガリラヤ湖畔の一日は奇跡の一日として見るべきに非ずして、善行連續の一日として解すべきである。此記事は特にイエスの奇跡を示す者にあらずして、神の子としての彼の聖善の靈の働きを錄す者である。

神はすべての人に奇跡を行ふの能力を與へ給はない。然し乍ら其他の種々の才能を與へ給ふ。或は美を觀るの能力を與へ給ふ。斯かる者を稱して美術家と云ふ。或は天然の祕密を探ぐるの能力を與へ給ふ。之を稱して天然學者と云ふ。其他文學者あり、政治家あり、工學者あり。賜物は異なれども聖靈は一なりである。そして如何なる動機に由りて是等の才能を用ひん乎、問題は玆に存するのである。そして神よりイエスの靈を受けて人は各自、イエスが奇跡を行ひ給

ひしと同じ精神を以て其才能を顯はすのである。卽ち善心に驅られて、苦しむ者に對する同情に堪へずして自發的に、多くの場合に於ては利害を省みず、前後を忘れ、唯、善を爲すの嬉しさに之を爲すのである。カイムはイエスの此時を稱して「ガリラヤの春時」と云うた。其理由は一にはイエスの傳道開始が多分紀元の三十四年春の彌生の頃であつたが故に、二には人としてのイエスの發育が其頂點に達し、愛は動けども反對は未だ起らず、能力は溢れて恩惠周くガリラヤ湖畔に行渡つたが故である。そして我等も亦神の聖旨に從ひ、惡魔と戰つて勝ちし後に、聖靈我等の靈に降り、筋肉は躍り、頭腦は明晰に、詩人は其歌を以て、音樂者は其樂と聲とを以て、醫師は其醫術を以て、其他各自、其の賜はりし才能を以て神と人とに仕ふる時に、我等にも亦我等相應の「ガリラヤの春」があるのである。奇跡はイエスの本職でなかつた。彼の本職は別に在つた。神の御言を傳へ之に殉ずる事であつた。然し乍ら聖父より奇跡を行ふの能力を賜

はりて、彼は愛の爲に之を使用せざるを得なかつた。卽ちイエスに取り奇跡は第一必要ではなかつた。然れども神の子たる彼に在りては、奇跡は之を行はざるを得なかつた。我等も亦其精神を以て、神より賜はりし各自の才能を用ふべきである。

注意すべきはイエスの行爲の徹底的なる事である。彼れ鬼を逐出し給へば鬼に憑れたる者は完全に癒さる。彼れ熱を癒し給へば病者は起ちて直に彼に仕へる。其他すべてがさうであつた。彼の癒しは迅速にして完全であつた。其故は彼に能力が充溢れたからである。そして今も猶ほ天に在りて彼は其癒しの奇跡を繼續し給ふ。多くの信者は迅速に完全に其困難き肉體の病を癒された。そして神の深き聖旨の故に肉體の病は癒されざる場合に於ても、靈魂の病の癒し、人としての生命の根本を犯す病の癒しは同じく迅速にして完全に行はれた。唯彼を仰瞻る事に由て完全なる平和は彼に臨んだ。唯信ずる事に由て恐怖と不安

は完全に取除かれた。奇跡は有り得る乎と近代人は問ふて云ふ。そして「有る」と基督者は答へて曰ふ。彼は身に奇跡を行はれた者である。彼も亦身に「ガリラヤの春」に遭うた者である。故に氷雪天地を閉ず此冷たき社會に在りて幾分か溫かき春風を起し得るのである。奇跡問題は畢竟る所實驗問題である。身に恩惠の奇跡を施されし者は、哲學又は神學又は心理學の說明なくして容易にイエスの奇跡を信じ得るのである。

△第十回　傳道と奇跡

馬可傳第一章三十五—四十五節。馬太傳八章一—四節。
路加傳四章四十二、四十三節。同五章十二—十六節。

イエスの目的は宣敎に在つた。「我は敎を宣傳ふが爲に來れり」とは彼が御

自分の天職に就て深く自覺し給へる所であつた。然るに彼に充溢れる能力があり、抑へ難き同情在りしが故に、恩惠……多くは治癒……の奇跡が宣敎に伴うた。然れどもイエスに取りては敎が主であつて奇跡は從であつた。彼は民が先づ其靈魂を救はれんことを欲し給ひて、其肉體の癒されん事は彼の主なる目的でなかつた。玆に於てイエスと民との間に要求の衝突があつた。民は敎を傳へられんよりも奇跡を施されんと欲し、靈魂を救はれんよりも肉體を癒されんと欲した。イエスの欲ふ所は民の求むる所でなかつた。斯くて失望の影は傳道開始第一日に既に彼の心を曇らせた。ガリラヤの春は日本の春の如くに短くあつた。三日見ぬ間の櫻かなである。ガリラヤ湖畔の一日は失望を以て終つた。

「昧爽にイエス早く起き人なき所に往き其處にて祈禱りせり」とある。早起きは多分イエスの習慣であつたらう。然し此場合に特に其の必要があつたであらう。神の子と雖も能力の消盡なくして不思議なる業を行ふ事は出來ない。然り

傳道は最大の努力を要する。是は自己を他に與ふる事である。單に筋肉又は腦髓の疲勞を感ずるに止まらず、自己中心の消耗を覺ゆる。而して之を癒し又充たす者は唯神のみである。斯かる場合に於て祈禱は祈求でない、靈の交通である。我が靈、神の靈に接して、我が空しきを神の充足れるを以て充たさるゝ事である。イエスの場合に於ても常に此の靈の再充實の必要があつた。朝早く起きて人なき處に往きて祈る。人に能力を奪はれて神に之を補はる。神の人は如斯くにして其事業を繼續するのである。

イエスは人を避けて寂しき處に獨り神と偕に在り給うた。而してシモンと其仲間とは彼の跡を逐ふて往いた。「慕ひて」ではない。「跡を逐ひて」である。恰かも警官が犯人の跡を逐ひかけしが如き熱心を以てゞある。イエスが其影を隱し給ひし後の群集の狀態が讀まれる。彼等はイエスを見失ひて絶望に瀕した。弟子等は彼等を靜めんと欲して能はず、茲にイエスを探し出して彼等の不穩に

備ふるの必要を感じた。曰く「人みな汝を尋ぬ」と。福音を聽いて靈魂を救はれんが爲に非ず、奇跡を施されて肉體の病を癒されんが爲に彼等は血眼になつてイエスを尋ねたのである。實に危險なる事とて神癒の恩惠を施すが如き事はない。之が爲に傳道の目的は全く誤解せられ、民は其施行を要求して止まず。若し其要求に應せざらん乎、彼等の怨みと憤りとを買はざるを得ない。イエスは此の危險を冒して恩惠の奇跡を施し給うた。彼は他の苦しむを見て助けざるを得なかつた。彼の愛は強くして自己の利害を顧るの遑がなかつた。然し乍ら彼の施せし恩惠の事業が終に民をして彼に叛かしめ、彼れ御自身の死を早むる原因となりし事は明かなる事實である。神の心とは斯くも穢き者である。

イエスは彼を逐ひかけ來りしシモン等に告げて曰ひ給うた「我れ今より再びカペナウムに往くの要なし、敎を宣傳へん爲に汝等と偕に附近の村々に往くべ

し、我は是が爲に出來りし也」と。傳道が我が目的である。我に治癒の奇跡を要求する者の許に還るの必要はない。我がカペナウムを出來りしは是が爲である。卽ち其民が生命の言葉を求めずして、肉體の平安を欲するからであると。憐むべきかなカペナウム、彼等は生命の主の最初の傳道を受けながら、福音を聽かんと欲せずして肉體を癒されんと欲した。主は彼等に就て失望し給うた。後に至りて彼をして彼等に就き悲痛の言を發せざるを得ざらしめた、曰く「既に天にまで擧げられしカペナウムよ又陰府に落さるべし」と（馬太傳十一章廿三節）。恩惠に遭ふは特權にして又危險である。愼むべきである。

カペナウムを去り、コラジン、ベテサイダ等附近の村々に傳道し給ひつゝありし間に、癩病患者の一人イエスに來りて跪き願ひて曰うた「汝若し聖意に適はゞ我を潔く爲し得べし」と。彼は「是非癒して下さい」とは曰はなかつた。「聖意ならば貴神は私如き者を癒す事が出來ると信じます」と曰ひてイエスに

對する彼の信仰を言表はした。イエスは癩病患者の此態度を甚く喜び給うた。同時に又彼の强き憐愍の心が動いた。彼は前例に懲りずして茲に復た癒しの奇跡を行ひ給うた。「我が心に適へり、潔くなれと言ふや否や直に癩病はなれ其人潔まれり」とある。癒すに最も困難なる癩病が神の子の一言に由つて直に完全に癒えたのである。

「イエス嚴しく戒しめ……彼をして去らしめたり」とある。何れも激しき言葉である。「睨み附けて突き出したり」と譯して稍や原語の意味を通ずるであらう。イエスは何故に御自分の癒し給ひし者に對して斯くも激烈なる態度を取り給うたのである乎。茲に我等は「優きイエス樣」を見ずして手荒き短氣の先生を見るではない乎。然し事實は覆ふべからずである。イエスは茲に確かに怒り給うたのである乎。私は思ふ、御自分の思慮なきを怒り給うたのであると。歡喜と憐愍とに驅られて癒しの奇跡を行ひたりとは雖も、其結果の御自身の御事業に

取り決して好ましき者にあらざる事を後に至りて悟り給うた。「此恩惠は施さゞりしものを」と彼は御自身に應へて言ひ給うた。然し乍ら能力は既に出て病者は癒された。恩惠はもはや撤回する事は出來ない。茲に於てか荒々しき態度を以て癒されし者を戒め、此事を何人にも告げてはならぬ、唯自然に癒されしが如くに裝ひ、舊約の律法に從ひ、祭司に己が身を示し、獻ぐべき物を獻げて、嫌ふべき病を癒されたりし公認を得よと言ひ給うたのである。そして斯く言ひて後に御自身手を下して會堂より其人を突出し給へりとある。

矛盾であると云へば矛盾である。然しイエスたる者が如斯き事を爲すべき筈はないと誰が曰ひ得る乎。感謝す福音記者は大抵の基督信者よりも遙に正直である事を。彼はイエスが怒り給し時には怒れりと記いて居る。そして其正直なる記事に由て我等はイエスの御心中を窺ふ事が出來るのである。人として生れ給ひし彼は神の子であつて同時に又人の子であつた。彼は或時は過失に陷り給

うた。然し乍ら罪の人が陷るやうな過失に陷り給はなかつた。愛の爲に、眞個の信仰に遭ふて嬉しさの餘りに、抑へ難き同情の念に驅られて後に至つて「爲さゞれば宜かりしに」と思ふ善事を行ひ給うた。支那の聖人さへ「人の過失を見て其仁を知る」と曰うた。イエスの陷り給ひし幾多の善行の過失、其れはイエスの仁のみならず又其聖をも示す者でない乎。私はさうであると思ふ。近代人の言葉を以て云ふならば、道德にも靜止的 (static morality) なると活動的 (dynamic morality) なるとの二種がある。所謂道德、敎會の道德、牧師傳道師の說く道德は大抵は前者卽ち靜止的道德である。卽ち神學者と道德家とが坐して考ふる道德である。卽ち實際の場合に於ては行はれざる道德である。而してイエスの此場合に於ける行爲の如き、是は後者卽ち活動的道德と見て、機に合ひたる最も美はしき行爲として受取る事が出來る。

そしてイエスが怒り給ひし理由は事實に由て證明された。彼は癒されし人に

沈默を命じ給ひしも、其人は其命に從はず、「彼れ出て先づ此事を大に言ひ傳へ、語り廣めければ、イエス此後あらはに邑に入る能はず、獨り人なき所に居給ひしかば人々四方より彼に來れり」とある。是れ確かに傳道の大妨害である。癒されし人は今日の多くの淺薄なる基督信者が爲すが如くに「證明」と稱して、誇り顔に、己が癒されし事を「大に言ひ傳へ語り廣めた」のであらう。然しイエスは此事を嫌ひ給ふ。彼の福音は福音として、卽ち神の眞理として宣傳へらるべき者である。そして時に奇跡の伴ふあるも、是は單に信者の信仰を强むる爲の者である。不信者に信仰を勸むる爲の者でない。イエスが沈默を命じ給ふ場合に我等は之を公言してはならない。

第十一回　敎し と 癒し

馬可傳二章一—十二節。馬太傳九章一—八節。路加傳五章十七—廿六節。

イエス一たびカペナウムを去り、附近の村々に傳道し給ひしが、復た舟にて故の邑に歸り來り、ペテロの家を己が家と定めて其所に居たまうた。其事邑に聞えければ直ちに多くの人々集り來り、門の內外に立つべき場所さへなきまでに詰合うた。イエスは彼等に敎を宣べ給うた。神の國の福音を傳へ給うた。彼が到る所に於て先づ第一に爲し給ひし事は此事であつた。

時に人あり、癱瘓を病みたる者を四人に舁せ、癒されんとてイエスの所に來た。然るに群集の故によりて近づき難かりければ、彼の居る所の家の屋根を破

り、癩瘋患者を床のまゝに釣下してイエスの前に置いた。即ち如何なる非常手段を取りても癒されざれば止まずとの決心を示した。イエス彼等の信仰を見て患者に對ひて曰うた「我子よ、汝の罪赦されたり」と。彼は前の癩病患者の場合の如くに、憐憫に動かされて直に病を癒さなかつた。「汝の罪赦されたり」と曰ひ給うた。病を癒す前に罪の赦しを宣告し給うた。而かも單に「汝」と曰はずして「我子よ」と呼掛け給うた。彼が如何に此病人を愛し給ひしかが窺はれる。「我子よ、汝の罪赦されたり」と。若し此病人に本當の信仰が有つたならば彼は是れ丈けで滿足したであらう。罪を赦さるゝは病を癒さるゝ以上の恩惠である。而かも唯信ずる事に由て赦さるゝと云ふ。福音の根本が茲に示されたのである。

然るに此所に數人の學者、即ち職業的宗教家が坐して此事を目擊して居つた。彼等はパリサイ派の人であつて、ガリラヤの諸鄕、ユダヤ、エルサレムより來

れる者なりと路加傳は錄して言ふ(五章十七節)。彼等はイエスに敎へられんと欲して來たのではない。彼の缺點を看出し、過失を捉へ、民の心を彼より引離さんとて來たのである。職を宗敎に執る者に此忌はしき心の在る事は古今東西異なる所なしである。彼等はイエスの癩瘋患者に對する言を聞き心の中に云うた「此人は何を曰うか、彼は神を瀆すのである」と。何事も善意に解せずして惡意に解する是等の宗敎家は、イエスの此言に褻瀆の罪を看出したのである。此發見を爲して彼等は得意然として心の中に云うたであらう「ナザレのイエス何者ぞ、神を瀆す者たるに過ぎず」と。而してイエスも亦聖者に非ずと解つて彼等は大に安心したであらう。

然るにイエスは直に彼等の心中を見透し給うた。今や彼等と議論するも無益である。唯事實を以て彼の言の空言にあらざる事を彼等に示すまでである。癩瘋の人に對つて「汝の罪赦されたり」とは彼等と雖も言ふ事が出來よう。然し

乍ら「起て汝の床を取りて行け」とは神より權威を賜はりたる者でなければ言ふ事が出來ない。そしてイエスは世の所謂「宗教家」と異なり、言葉の人に非ずして權威の人である事を彼等に示さんが爲に、卽ち彼れ人の子は神に代り地にて罪を赦すの權威あることを彼等に知らせんが爲に、遂に癲癇患者に對ひて言ひ給うた「我れ汝に告ぐ、起きて床を取り汝の家に歸れ」と。而して其聲に應じて彼は直に起きて床を取り、衆人の前を通りて出行いた。之を見し群衆は皆な駭いた。彼等は神を崇めて曰うた「我等は未だ曾て斯の如きことを見ず」と。治癒は例の通り卽時的で且完全であつた。患者は立所に完全に癒されて歡び勇んで家に歸つた。實に神に相應き治癒の業であつた。

此處に多くの大切なる事が敎へらる。第一に疾病は罪の結果であると云ふ事である。少くとも此人の場合に於てさうであつた。而して又多くの人の場合に於てさうである。故に完全に根本的に疾病を癒されんと欲せば、先づ罪を赦さ

れなければならない。罪を赦された時に疾病の根本が絶たれたのであつて、其の何時か必ず癒さるゝは最早疑ひないのである。「エホバは汝のすべての不義を赦し、汝のすべての疾を癒し給ふ」とあるが如し(詩第百三篇三節)。そして多くの場合に於て、縱し疾の癒しを見る能はざるも、罪の赦しを實驗した丈けで、基督信者はヨブの如くに癒しを未來の希望として存して、疾に耐へ、死に就くことが出來るのである。

第二はイエスに罪を赦すの權力があると云ふ事である。イエスは單に最大の宗敎家、最高の道德の敎師でない。彼は神の子にして人の罪を赦す者である。其れ故に彼は疾を癒す事が出來るのである。神は彼に由りて義に由りて人の罪を赦すの途を設け給うた。そして又彼にすべての人を審判くの權能を授け給うた。ペテロが曰へる如く「此ほか別に救ある事なし、そは天下の人の中に我らが依賴みて救はるべき他の名を賜はざれば也」である(行傳四章十二節)。事は

良心に關はる問題である。理論は別として、人は未だ曾てイエスに依らずして我罪は確かに赦されたりとの確信と之に伴ふ欣喜とを得た事はない。我等が羅馬書三章二十五節の研究に於て學んだ通りである。

第三は罪の赦しと之に伴ふすべての恩惠は信仰に由ると云ふ事である。信仰に由て救はるとはパウロが初て敎へた事でない。初よりイエスが敎へ又行ひ給うた事である。信仰にも勿論程度がある。「若し聖意ならば汝我を潔く爲し得べし」と言ひし癩病者の信仰も信仰であつた。「唯一言を出し給へ、然らば我僕は癒えん」と言ひし百夫の長の信仰も信仰であつた。何れにしろ信仰は信仰であつて、「信仰なくして神を悅ばすこと能はず」である（希伯來書十一章六節）。人の救はるゝは信仰に由る。知識に由らず、學究に由らず、又所謂道德倫理に由らず、信仰に由る。神あるを信じ、且神は必ず己を求むる者に報賞を賜ふ者なるを信じて、神に來る者に赦しと癒しと、其他すべての恩惠が下るのである。

若し學問の祕訣が考證であるならば、宗敎の祕訣は信仰である。依賴む心である。此心ありて神を動かす事が出來る。そして神に依りて宇宙を動かす事が出來る。宗敎に在りては信仰第一である。

そして信仰は必しも自分の信仰でなくとも可い。他人の信仰も亦我を助くるのである。癲瘋患者を四人に舁せてイエスの所に携れ來りし者等（多分其親戚であつたらう）の信仰に感じて彼は此病人を癒し給うた。百夫の長の信仰に感じて其僕を癒し給うた。サイロピニケの婦の信仰に感じて其女を癒し給うた。斯くして我等は自分の信仰を以て他人を助くる事が出來る。又他に乞ふて其信仰を以て自分を助けて貰ふ事が出來る。何故に然る乎、其理由は判らない。人はすべて相對的の者であつて、すべての事に於て相互に關聯する者である。神は絕對的個人主義を認め給はない。誠に有難い事である。

信ずる者と相對して疑ふ者があつた。パリサイ派の學者等はイエスの缺點を

探らんとて遠くユダヤ、エルサレムの地より來た。彼等は病人が癒されたとて歡びて神を崇めなかつた。彼等はイエスが神の名を瀆したりとて彼を責めた。彼等は後に安息日を瀆したりとて、又は罪ある者と共に食したりとて、イエスを責めた。彼等は全然消極的人物であつた。善事は見えず、惡事にのみ氣が附いた。神は預言者ホゼアを以て「我れ矜恤を欲みて祭祀を欲まず」と曰ひ給ひしが、是等の學者達は其反對に祭祀の細事にのみ意を注いで、義と愛と信とに重きを置かなかつた。イエスと彼等との間に天地雲泥の差があつた。二者の分離衝突は此時に始つた。そして終に十字架に達した。矜恤か祭祀か、信仰か神學か、二者の相違は根本的であつて、到底調和し得べきでなかつた。

イエスと病人と宗教家、癒し得る者と、癒されんと欲する者と、疑の眼を以て傍觀する者と。此の三つは常に在るのである。そして牧師、傳道師、神學者等、宗教を本職とする者の陷り易き危險は、以上第三者の地位に立つ事である。

信仰は神を動かす力であつて、懷疑は神を敵に持つ心である。溫き心は萎へ、熱き信仰は失せ、唯冷たき鋭き批評の眼のみ存りて、人はパリサイの人となりてイエスを敵に持ちて、終に彼を十字架に釘けるに至るのである。

第十二回　稅吏マタイの聖召

馬可傳二章十三—十七節。馬太傳九章九—十三節。路加傳五章廿七—卅二節。

人類の信仰的革命が湖水の畔より始まりし例は二つある。其一つは勿論ガリラヤ湖畔に始まりし基督教の發祥であつて、其第二は瑞西國ジネバ湖畔に於けるカルビン主義の濫觴である。先づ第二のものに就て云はんに、ジネバ潮はガリラヤ湖に比べて其廣さに於ても深さに於ても、又風光の明媚に於ても遙かに

勝る湖水である。而して其湖水尻に建てられしジネバの市にジョン・カルビンが來りしより、茲にガリラヤ湖畔に於て始められしイエスキリストの福音が近世紀の初期に於て復興し、其生命の水は流れて和蘭に及び、英國に渡り、終に大西洋を横斷して亞米利加大陸にプロテスタント敎の大勢力を作るに至つた。第十六世紀以後の世界歴史はジネバ湖とカリビン主義とを離れて論ずる事は出來ない。ジョン・ノックスは茲にカルビンより純福音を授かり、彼は之を齎して故國スコットランドに歸り、其民の間に之を播きたれば、美種は沃壤に播かれて六十倍百倍の果を結び、今や英國、米國、濠洲、其他英民族の到る所に、カルビン主義の隆盛を見るに至つた。

ジネバ湖に比べてガリラヤ湖は遙に劣りたる湖水である。然れども其畔に始まりし世界運動は其結果たる永久的にして亦宇宙的である。人類の歴史に於て最も廣く知られたる名は、此小なる湖水に漁業に從事せし漁夫の名である。ペ

テロとヨハネ、其兄弟アンデレとヤコブ、彼等はガリラヤ湖の漁夫であつた。彼等はイエスに召かれて其弟子となり、福音の宣傳を委ねられしが故に、人類の敎師、世界の儀表となつた。基督敎徒の迫害者を以て有名なる羅馬の大帝ジュリヤンは死に臨んで叫んだとの事である「ガリラヤ人よ汝我に勝てり」と。誠に世界はガリラヤ人に由て、キリストの福音を以て征服され、又征服されつゝあるのである。ガリラヤ湖は其長さは十三哩、幅は八哩、深さは百五十呎を越えず、湖水としては最小き者の一なりと雖も、其世界的感化力たるや實に無類絶倫である。

そしてガリラヤ湖畔は更に尙ほ一人の世界的人物を貢献した。其人はマタイと稱ばれしアルパヨの子レビであつた。彼は身はユダヤ人でありながら敵國羅馬の政府に雇はれて己が國人より稅を徵收する業に從事する者であつた。國を賣り民を賣り信仰を賣りて耻とせざる最も卑しき者の仲間に入つた者である。

故に當時卑しき者と云へば「稅吏と娼妓」と云うたのである（馬太傳廿一章卅一節「イエス曰ひけるは誠に汝等に告げん、稅吏と娼妓は汝等より先に神の國に入るべし」とを參考せよ）。然るにイエスは此稅吏の內より彼の弟子の一人を選び、後に彼を擧げて十二使徒の一人となし給うたのである。大膽と云へば大膽、物好と云へば物好である。「人もあらうに」と人はイエスの此行爲を評したであらう。特に漁夫を選んで其弟子となした事さへ訝しきに、更に稅吏を召きて隨身の一人となすに至つては、狂か偏か、唯驚くの外ないのである。而かもイエスは敢て此事を爲し給うたのである。彼れ湖畔を歩み給ひしにレビ（一名マタイ）と云ふ者の稅吏の役所に坐し居たるを見て、我に從へと曰ひければ彼れ起ちて從へりとある。玆に確に稅吏はパリサイの學者等に先ちて神の國に召かれたのである。

「神は偏らざる者なり」である（行傳十章卅四節）。神は顏に由て人を受け給は

ずとの意である。「エホバ、サムエルに曰ひけるは……我が視る所は人に異なり、人は外の貌を見、エホバは心を觀るなり」とある（撒母耳前書十六章七節）。人の職業何者ぞ、其外の貌に過ぎない。遺傳、階級、是れ亦肉の事であつて、稅吏であつて最も卑しき者であつた。然し乍ら神の子イエスの視たまひしマタイはアブラハムの裔であつて、神の國の福音を委ぬるに最も適したる器であつた。稅吏たればとて此貴き器を棄つべきではない。故にイエスは「我に從へ」と云ひて、此賤しめられし者を己が弟子として召き給うたのである。

そして此召きに與りしマタイの喜びは非常であつた。彼は玆に生れて初めて自己を知つて吳れる者に遭うたのである。彼は元來人が見る如き卑しき者でなかつた。彼は或境遇に强ひられて止むなく羅馬政府の官吏となつたのである。然れども彼の心には眞の愛國心が燃えて居つた。イスラエルの贖はれん事は彼

の衷心の祈願であつた。彼は人知れず神の人の來つて彼を召かん事を待つて居た。然るに計らざりき茲に大敎師イエスの自分の名を呼んで「我に從へ」と言ひ給ひしに會した。彼の歡喜に物の譬ふべきがなかつた。彼は「我時至れり」と思うた。故に路加傳の記すが如くに彼れ一切を捨て起てイエスに從つた。茲に召きしイエスの大さに併せて召かれしマタイの貴さが讀まれるのである。

そして此マタイが後に何を爲した乎其事に就て聖書に何の錄す所がない。唯彼の名が十二使徒の名簿錄に存するのみである。然し乍ら第一福音書が彼の名を以て後世に傳へられしが故に、彼は世に最も廣く知れ渡りたる人の一人となつた。縱し所謂「馬太傳」は使徒マタイの筆に成りし書に非ずとするも、彼に或る密接の關係ある書である事は明かである。マタイの如何なる人なりし乎は馬太傳に由て略ぼ知る事が出來る。「マタイの福音書は、凡ての點より觀察して基督敎が產み出せし最も大切なる書である。未だ曾て是れ以上の書の世に出し

ことなし」とはルナンの批評である。斯かる書に其名を結附けられしマタイの性格は推して知るべしである。彼は嚴格の人であつた。特にイエスの敎訓に意を注いだ人であつた。イエスをユダヤ人の待望みしメシヤと見た、亦彼に人類の王たる權能を認めた。マタイは何を爲さなくとも、馬太傳を世に出すの原動力又は史料の供給者たりし丈けにて永久的大事業を爲した。稅吏マタイに由らずして馬太傳の世に出でざりし事を知つて、イエスは彼を召きてガリラヤ湖畔の砂の中より價値いと貴き一個の眞珠を發見し給ひし事を知るのである。

マタイはイエスに知られ彼に召かれて後は稅吏の職に止まらなかつた。彼は一切を捨てイエスに從つた。而已ならず彼は公けに彼の稅吏廢業の宣言をなした。卽ち留別の筵を設け、舊友同僚を之に招き、之にイエスの出席を乞ひて、彼を彼等に紹介した。自己の改信を告白すると共に、彼等の爲に傳道の途を開いた。誠に愛すべき男らしき行爲である。信仰は心の事であると稱して之を世

に告白せざるは、誠實の人の潔しとせざる所である。

そしてマタイは筵を設けて別を世に告げてイエスに從つた。彼は佛徒が出家する時のやうに涙を以て世と別れなかつた。新嫁が新郎の家に往く時のやうに賀筵を設けて新生涯に入つた。「レビ己の家にてイエスの爲に豐盛なる筵を設く」とある。マタイは大宴會を開いて世を去てイエスに就いたのである。痛快此上なしである。

第十三回　舊き人と新しき人

路加傳五章廿七—卅九節。馬可傳二章十五—廿二節。馬太傳九章九—十三節。

イエスは人として最も著るしき人であつた。故に彼は到る所に著るしい言を

發し給うた。彼がヤコブの井の畔にてサマリヤの婦に語り給ひし言は永久不變の眞理であつた。其如く彼がマタイが設けし宴會の席上に發し給ひし二三の言は、是れ又偉大深遠の言であつた。實に恩惠の言は甘露の如くに到る所に彼の口より落ちた。そして之を記錄した福音書は人類が有する價値いと貴き智慧の寶庫である。

そしてイエスより著しき言を引出すに方て最も有力なりし者は、常に彼の批評家として彼の跡に隨ひ、彼に何か落度あれかしと批評の眼を睜つて彼の言行に注目せしパリサイ派の人々、並に其學者達であつた。イエスが發し給ひし最も驚くべき言は是等の職業的宗教家に答へ、又彼等を誨へんが爲に發せられし者であつた。世に實は批評家程有益なる者はないのである。彼等の疑察又は攻擊があつて深い眞理は打出され、芳ばしき香は放たるゝのである。人類が有する貴き眞理の半ば以上は反對の批評に答ふる爲に世に出し者なるを知つて、眞

理闡明の爲に批評反對の如何に必要なる乎が推量かるゝのである。

悔改めし稅商マタイが設けし宴會の席上に於て學者とパリサイの人はイエスの弟子に恨言いて曰うた「汝等稅吏また罪ある人と共に飲食するは何故ぞ」と。民の敎師を以て自から任ずる者が俗吏俗人と共に飲食するは何故ぞとの詰問である。之に答へてイエスは曰ひ給うた「康强なる者は醫者を要せず惟病ある者之を需む」と。是は諷刺であつて同時に敎訓である。汝等パリサイの敎師等は健康者である、故に我を要せず。稅吏マタイは病人である、故に我を需むとの意である。然し是は確かにアイロニー（反語）である。本當の病人は是等の宗敎家であつて、比較的健全なるはマタイと共同僚とであつた。イエスは玆に確にアイロニー（皮肉）を語り給うたのである。皮肉必しも惡事でない。預言者は多く之を用ひた。寢れる良心を喚起す爲に皮肉は度々有效である。强康なる者、我は罪を犯したる覺えなければ必ず大往生を遂ぐるを得べしと言へりと云ふ故

大隈侯の如き人、其の他罪の赦しの福音を聞くも何等の喜びをも感ぜざる我國多數の所謂紳士と淑女、斯かる人等に向つてイエスは同じ事を言ひ給ふ「我は汝等に用なし、我は己が罪に悶えて赦しを需めて泣叫ぶ者を訪はん」と。そして若し是等の「俯仰天地に耻ぢず」と言ふ自稱君子がイエスに向て「我は果して醫者を要せざる强康なる者である乎」と問ふならば、彼は答へて曰ひ給ふであらう「汝は强康なりと言ふが故に病人である。汝等の罪は存れり」と（ヨハネ傳九章四一節參考。）

次ぎは斷食問題である。パリサイ人等はイエスが俗吏俗人輩と飲食を共にする所に彼の缺點を見た。彼等は又彼が豐盛なる饗宴に招かれ快飲飽食する所に缺點を見た。缺點又缺點である。彼等の眼は缺點を見るに鋭くある。彼等はイエスに問ふて曰うた「ヨハネの弟子は屢斷食をなす、我等パリサイの弟子も亦然り、然るに汝の弟子は飲むこと食ふことを爲すは何故ぞ」と。言を代へて云

へば「汝の宗教には節制斷食なき乎」との問ひであつた。そしてイエスは之に答へて曰ひ給うた「無し、我が宗教に規則として、又は修養手段として、神の特別の恩惠に與る途としての斷食はない。神の國は難業苦行して得らるゝ者でない。卽ち斷食に何の功德もない。然れども爲さゞるを得ざるが故に爲す斷食がある。新郎の朋友が新郎と別かるゝ時に悲哀の極に飲食を廢するが如き斷食はある。卽ち自然的の斷食はある、人工的の斷食はない。そして我が弟子が其新郎なる我と別かるゝ時は必ず來る。其時汝等は彼等が本當に斷食するを見るであらう」と。(馬太傳十七章廿一節、馬可傳九章廿九節に「祈禱と斷食」とある「斷食」の二字の改譯聖書に除かれてあるに注意せよ。)

パリサイ人並に學者等のイエスの行爲に關する敵意的批評は何を示す乎。イエスと彼等との間に根本的相違のある事を示す。イエスは新らしき人なるに彼等は舊き人である。故に彼等はイエスの敎を受くる能はず。イエスが弟子とし

て彼等を選ばず却つて漁夫並に稅吏を選びしは之が爲である。若し强ひて彼等を弟子とせんか、是れ彼の不幸にして又彼等の不幸である。恰も新しき布を以て舊き衣を補ふが如く、又は新しき葡萄酒を舊き革袋に盛るが如し。新舊相合ざるが故に害あつて益なし。イエスの福音はパリサイ人並に學者、今日の言葉を以て言ふならば官僚的宗敎家並に學閥的神學者と相合はず。之は好く政府又は敎會を離れて、普通の生涯を送る者、卽ち平民又は平信徒に適する者であるとの事である。

新と云ひ舊と云ふ。靈の事に於ては時の問題に非ずして質の問題である。說の新舊を云ふに非ず、勿論流行の新舊を云ふに非ず、靈肉の關係を云ふのである。靈は永久に新しき者、肉は永久に舊き者である。「儀文の舊きに由らず靈の新しきに由りて事ふ」とパウロが曰ひしが此區別である。政府と云ひ敎會と云ひ、規則と云ひ儀文と云ひ、敎派と云ひ學派と云ひ、是れ皆肉の事であつて舊

い事である。之に靈の自由はない。永久に生々したる所はない。パリサイ人如何に熱心なるも、其熱心たる主義又は教義の熱心であつて、生命の溫き所がない。靈に比べて肉は盡く機械的である。人工的である。朋黨的である。其奉ずる主義は如何に新しくあるとも、其維持する說は最新の說なりと雖も主義と云ひ法式と云ひ系統と云ひて、閥を作り、派を爲す者はすべて肉に屬する者にして舊くある。之に反して靈は永久に生きて永久に新しくある。生命は之に定義をすら附する事が出來ない。如何なる黨派も生命を專有する能はず、如何なる學說も生命の意義を言盡す事能はず。靈は靈である。生命は生命である。理化學の術語を以て生命を言表さんと欲して能はざるが如く、教義又は神學を以て靈を說明する事は出來ない。生物に對して礦物並にすべての無生物は舊くある。靈に對して肉並にすべての肉性は舊くある。

以上の意味に於てパリサイ人並に學者は舊くあつた。同じ意味に於て今日の

すべての政府者並に教會者、學者並に博士、文學博士、法學博士、神學博士、牧師、宣教師、社會主義者、ポルシェビスト、皆な悉く舊くある。彼等は其奉ずる主義を異にし、其據て立つ主張を異にすると雖も、其根本の精神に於て同じである。即ち彼等はすべて肉の人であつて舊くある。神に反きしアダム丈け、兄弟を殺せしカイン丈け舊くある。恰もパリサイ人とサドカイ人とヘロデ黨とが黨を異にしながら、根本の精神を共にせしが故に、イエスに對して一致したと同じである。

そして此世の政治家、宗教家、學者、主義者は盡く舊くあるに對してイエス一人は常に新しくある。世に本當に新人と稱すべき者は唯イエス一人である。彼は純なる靈の人、永遠の生命の保有者であるからである。今や新說は數限りなく唱へらるゝが、人として恒に新しき者は唯イエス一人である。他は悉く舊くある。團體を作り、多數を其内に引入れて、勢力を世に張らんと欲する者は

悉く舊くある。舊神學も舊くある、新神學も舊くある。肉は悉く舊くある。此世は恒に舊くある。新しき者は唯一つ、靈なる神是れである。そして此の靈を迎へ之を心に宿したる者のみが本當の新人である。他は悉く舊式である。靈界のバンカラである。舊きアダムの舊き子供である。

斯く曰ひてイエスは舊き人達に向つて一片の同情なき能はずであつた。「舊き葡萄酒を飲みて直に新しき葡萄酒を好む者は有らじ、是れ舊きは最も好しと云へばなり」と。舊人は直に新人たる能はず、舊きを慕ふは人の自然である。舊宗教に縋る人、舊思想に捉はるゝ人、彼等に對して同情なき能はずである。イエスは御自分が新人の模範であつたとて、舊式の人を蔑むが如き狹き人でなかつた。彼は彼等が彼の福音を容易に解し得ざる理由を克く解し給うた。彼は敵に對してさへ深き同情を懷き給うた。

第十四回　安息日問題

馬可傳二章二三—二八節。馬太傳十二章一—九節。路加傳六章一—五節。

イエスは靈の人であつて新しき人であるに對して、パリサイ人は律法的規則的の人であつて舊き人であつた。故に兩者の衝突は免れなかつた。既に罪の赦しに就て、弟子の選擇に就て、俗人と飲食を共にする事に就て、斷食の事に就て意見の衝突がつた。そして今又安息日の事に就て衝突が起つた。信仰の根本に於て相違があつて、人生すべての事に於て衝突が起らざるを得ない。

十誡第四條に曰ふ「安息日を憶えて之を聖く守るべし」と。安息日聖守の必要に就ては十誡研究の時に述べたから、今は之を繰返さない。然れども如何に

之を守るべき乎は決して容易い問題でない。そして之を律法的に解釋するのが當時のユダヤ人の立場であつて、精神的卽ち靈的に解釋するのがイエスの主張であつた。當時のユダヤ人の規則に從へば人は安息日に二千キビット（八丁二十間）以上の距離を旅行してはならない。之はシナイの荒野に於てイスラエルの民が彼等が住ゐし天幕より神の幕屋に到りし距離であつた。人は安息日に麥を苅つてはならない。又打穀てはならない。野に在りて麥を摘みて食ふは苅つて打つに等し。故に安息日に之を爲すは同時に二つの罪を犯すのである。人は安息日に普通行はるゝ以外の事を爲してはならない。例へば齒痛を病む場合に、水を以て嗽ひするは可なれども、痛を止めんとて酢を以てしてはならない。安息日に特別療法を行ふは罪である。其他すべてが此類である。安息日の聖守に關し三十九ヶ條の禁令があつて、其各條に又細則が附せられたと云ふ。其煩瑣たるや思ふべしである。

如斯くして、歡喜の日、感謝の日、讃美の日であるべき安息日が、重荷の日、困苦の日、憂悶の日であるに至つた。人を救はん爲に世に現はれ給ひし神の子は安息日を僞善者の手より救出して、之を元始の平安に還すの必要があつた。天地の成りし時に「晨星相共に歌ひ神の子たち皆な歡びて呼はりぬ」とあるに（ヨブ記三十八章七節）何故に之を記念する日に感謝と歡喜とを以て溢れざる。安息日を聖むると云ふは之を歡呼の日と爲す事である。聖むは其一面に於て言祝ぐである。英語に在ても hallow は「聖む」を意味し、又「叫ぶ」の意である。

安息日に天然を樂しむは罪でない。安息日に痛みを去り病を癒すは神の喜び給ふ所である。安息日は神の子たちの祝日である。是は規則を以て人を縛る日でない。自由を與へて彼を放つべき日である。安息日は神が此自由、此歡喜を人に與へんために設け給ひしものである。そして人の子は人の主であるが故に、同時に安息日の主である。「安息日は人の爲に設けられたる者にして、人は安息

日の爲に設けられたる者に非ず。然れば人の子は安息日にも主たる也」と云ふ。實に深い言である。

此世の國の場合に於ても法律は民の爲であつて民は律法の爲でない。故に法律が民の安寧幸福を妨ぐる場合には、國王は其至上權を以て之を變更する事も、中止する事も、或ひはまた廢止する事も出來る。神の國の法律に於ても同じである。神の子にして人類の王なる人の子キリストは、其至上權を以て神の國の法律を變更する事も、改正する事も出來る。斯く曰ひてキリストは御自身に就て驚くべき事を曰ひ給うたのである。安息日問題は玆に至てキリスト神性問題に移つたのである。

四福音書の記す所に依れば、イエスは七回ユダヤ人の安息日に係はる法則を破つて、故意に此問題に就て彼等に戰を挑み給ひしやうに觀える。然し乍ら是れ戰を好んでの挑戰ではなくして自己證明の爲の最良手段であつたと思ふ。安

息日問題はイエスの神の子としての至上權を證明確立する爲に最も適當なる問題であつた。彼は事實を以て安息日に主たる事を證明して、御自身が誠に神の獨子、舊約の撤廢者にして、新約の設置者、人の義とせらるゝは法律の行に依らず信仰に依ると云ふ、所謂「新しき誡」を世に齎す爲に臨りし者なる事を證明し給うたのであると信ずる。

私は主の此言に由りて、私が過去千九百年間基督信者が取り來りし慣例に從ひ、日曜日を以て私の安息日と定め、之を守りて今日に至りし私の立場を辯明する。基督信者の安息日は一週の第一日、卽ち日曜日なりとは明白の事であつて、別に其可否を論議する必要なき事と思ひしに、近頃米國より末世之福音なる者入り來りて此在來の慣例に反對し、安息日は第七日卽ち土曜日である、日曜日を安息日として守る者は聖書に戻り神に反く者であると唱へ、其攻擊の鋒を私にまで向けるを見る。米國は教派の發生地であつて、其處に起りし教派は

數百を以て算へらる。孰れも我こそは聖書的であつて、他は盡く異端であると唱へ、福音の平和を亂せしこと實に甚しい。末世之福音の如き米國基督信者の意見の一と見ればそれまでゞある。只我國人中、安息日問題の爲に惱まされ、部分的問題を以て全體問題と見做し、無用の波瀾を我國信者の間に起すは最も悲むべき事である。私は基督信者の安息日は日曜日であると信ずる。其理由はキリストは週の第一日卽ち日曜日の朝墓より復活し給うたからである。聖書に他の何の證言がなくとも此明かなる事實に由て、基督信者がユダヤ人の安息日なる土曜日を守るを止めて日曜日を聖日となして守るに至つた理由は充分である。私は日曜日を守りてキリストの復活を記念するのである。そして安息日に主たるキリストが、安息日を廢するに非ずしてユダヤの土曜日を改めて基督信者の日曜日と爲し給ひたればとて、少しも不思議はないのである。是れ人が爲したる事ではない。安息日に主たる者が爲し給ひし事である。神の御眼より見

たまひてキリストの復活は天地の創造以上の出來事であつた。そして造化完成を記念する爲の安息日を改めて、キリスト復活を紀念する爲の安息日と爲し給ひしとは、キリストの御父なる眞の神の御事として最も應はしき事である。

私は基督信者の安息日として週の第一日を守る。然し乍ら守ると言ひてユダヤ人が第七日を守りしやうに法律的には守らない。罪を赦されたる恩惠の子供として感謝と歡喜を以て之を聖守する。「神の律法の命ずる第七日安息日」と云ふが如き者は基督信者としての私の安息日ではない。末世之福音信者は例規又は法律、又は法度又は誡命と云ふが如き言葉を使ひて第七日安息日の聖守を以て我等に迫ると雖も、是は全く舊約の言葉であつて、新約に在りては誠に意味の輕い言葉である。畢竟するに英米人、殊に米國人は實利主義の民であつて、何よりも外面的の秩序卽ち法律を愛するのである。故に彼等の信仰が何時となく律法に後戻りするのである。メソヂスト教會がアルミニアン主義であつて信仰

よりも行を重んずる傾きがある。ユニテリヤン主義、ホリネス運動、而して又此第七日安息日聖守の主張、其唱ふる教義は異なれども其根本は英米人の律法的思想である。我等はパウロに倣ひ、是等の律法的信者に言ふべきである、「汝等何ぞ今弱き賤しき小學に返りて復び之に僕たらんことを欲ふや。汝等慎みて月と日と節と歳とを守る。我れ汝等に就て危む」と（加拉太書四章九、十節）。末世之福音信者は「エホバ言給ふ、新月毎に、安息日毎に萬の人我が前に來りて崇拜をなさん」とのイザヤ書六十六章廿二、廿三節を引いて余輩に土曜日聖守を迫ると雖も、余輩の彼等に訊ねたきは彼等は同時に新月（月朔）の聖守を主張するのである乎。畢竟するに彼等の信仰は新約より舊約への背馳である。余輩は單に安息日問題に就て彼等と意見を異にするのではない。信仰の根本を異にするのである。聖書を尊び、キリストの再臨を信ずる點に於て彼等と信仰を同うするやうに見ゆれども、之は單に外面の類似に過ぎない。余輩は再びパ

ウロの言を引いて此問題に關する余輩の立場を明かにする、曰く「是故に或は飲む事、或は食ふ事、或は期節、或は月朔（新月）、或は安息日の事に由り、人をして汝等を議せしむる勿れ」と（コロサイ書二章十六節）。

第十五回　山上の垂訓

馬太傳五章—七章。路加傳六章二十—四九節。

「ヨハネの囚はれし後イエス、ガリラヤに至り神の國の福音を傳へ」たりと云ひ（馬可一章十四節）、「カペナウムに至りイエス安息日に會堂に入りて教を爲し」たりと云ひ（同廿一節）、「イエス偏くガリラヤの國を經めぐり其會堂にて教を宣べ」たりと云ひ（同卅九節）、「イエス復びカペナウムに來りしに彼の家に居ること聞えければ直に多くの人々集ひ來れり、イエス彼等に教を宣ぶ」と

云ふ(二章一節)。「イエスまた海邊に往きしに人々彼に來りければ是等を敎ふ」と云ふ(同十三節)。敎ふるのがイエスの第一の目的であつた。然るに馬可傳はイエスの敎に就て多くを傳へない、主として彼の行働に就て錄す。故に敎は之を他に求めなければならぬ。そして馬太傳と路加傳とは馬可傳の此缺乏を補ふものである。

イエスの敎の最も善き模範は山上の垂訓である。馬太、路加兩傳が之を傳ふ。馬太の分は其五章より七章に至り百七節より成る。路加の分は其六章二十節より四十九節に至り二十九節を以て了る。故に一讀して其大意を知らんと欲せば路加傳に依るを宜しとす。然し普通「山上の垂訓」といへば馬太傳所載のものを指して云ふ。その諄々として天國の市民の資格、義務、警誡を說く所、他に其類を見ず。基督信者の大憲章と稱ばれ、至大至重の文字である。

山上の垂訓を研究するに方て、先づ第一に我等の心に留め置くべきは、其れ

が天國の福音であつて、キリストが宣告し給ひし新しき律法ではない事である。多くの人は之を天國の律法と見るが故に全然其意味を取違へるのである。是はイエスが傳道の首途に於て、ガリラヤの春に際し、歡喜の餘りに述べ給ひし福音卽ち喜びの音信である。其事は明かに其發端の言葉に由て示さる。「福なり心の貧しき者は」。「福ひなり、福ひなり」とイエスは口を開くや否や八回繰返し給うた。聖アムブロースは之を音樂の八音を鳴らす八箇の美はしき鐘の音に譬へた。「福ひなり」を以て始められた此大說敎が人を威嚇し又は審判く者でないに相違ない。モーセの律法はシナイ山上、火の煙の揚る所に雷鳴を以て授けられた。之に反してイエスの山上の垂訓は、ガリラヤ湖畔の風凉しき所に靑葉萠出る小山の上に與へられた。山上の垂訓をより嚴しきイエスの律法と見る者は全然之を誤解する者である。我等は恩惠の主より恩惠の言葉に與かるの態度を以て其研究に取掛からねばならぬ。

馬太傳所載山上の垂訓は三章百七節より成る大說敎である。そして其一字一句が悉く重要文字であるが、然し其内にまた輕重の差なき能はずである。何れの說敎にもあるが如くに、イエスの此の大說敎にも亦頂點があつた。そして其の頂點を知るに由て其全體を窺ふ事が出來る。そして其頂點は七章十二節である。卽ち

是故に凡て人に爲られんと欲ふ事は汝等また人にも其如く爲よ

と。「福ひなり」との喜ばしき一聲を以て麓を發足せし此信仰的大登山は、黃金律として全世界に讃えらるゝ此一節に到て、巔の頂點に達したのである。之を富士山に譬へん乎、八箇の祝福は之を麓の八湖と見て可らう。そして登り登つて登り詰めたる所、卽ち富士山で云へば劍ケ峯と云ふ所が山上の垂訓に於ける黃金律である。其間に胸突八町と云ふが如き絕壁に類したる所もある。律法もある。審判もある。然し乍ら山は恩惠の山であつて、其麓は祝福の湖、其巔は

愛である。我等は中間の巨巖凄愴たるに氣を奪はれて全山の麗姿を見逃してはならない。

第五章初の二節は此大說敎が爲されし場合を記した者である。イエスの聲名四方に擴りければガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダンの外より多の人々來りて彼に聽かんとした（四章末節）。今やカペナウムに於けるペテロの家は此群集を受くるには餘りに狹くあつた。又邑と湖との間に彼等を容るるの場所がなかつた。此有樣を見てイエスは彼等を導きて背後の山に登り給うた。そして原語に在りては山は特別の山、卽ちかの山であれば、イエスが祈禱の爲め又は四方展望の爲に屢々登り給ひし彼れ特愛の山であつたらう。彼は其處に坐し給うたとあれば、彼は暫く彼等を敎へんとて着席し給うたのである。聽衆山上の高臺に集り弟子等は彼の足下に坐す。春既に半ばにして靑草軟き敷物を給へ、花は笑ひ、鳥は囀りて、垂訓最良の材料を供した。此聽衆と天然と

ありて、彼は口を開き、肅然沈默を破つて語り出し給うた「福ひなり」云々と。

五章三節以下十二節までは垂訓の序言として見ることが出來る。福音の紹介の辭であると同時に其縮寫又は梗概である。若し基督敎を凝結したる者が山上の垂訓であるならば、其精要は其冒頭を飾る是等祝福の辭である。

（一）福なり心の貧き者は、天國は卽ち其人の有なれば也。
（二）福なり哀む者は、其人は安慰を得べければ也。
（三）福なり柔和なる者は、其人は地を嗣ぐことを得べければ也。
（四）福なり饑え渴く如く義を慕ふ者は、其人は飽くことを得べければ也。
（五）福なり矜恤ある者は、其人は矜恤を得べければ也。
（六）福なり心の淸き者は、其人は神を見ることを得べければ也。
（七）福なり和平を求むる者は、其人は神の子と稱へらるべければ也。
（八）福なり義き事の爲に責めらるゝ者は、天國は卽ち其人の有なれば也。

以上祝福の辭は八節である。孰れも驚くべき言である。初めて之を聽きし者は驚駭の感に打たれたであらう。祝福は慕ふべくあれども、其條件が意外であ

る。イエスが福ひなりと稱へ給ひし者は孰れも此世が不幸と見做す者である。此世は云ふ、富める者は福なり、位ある者は福なり、智慧ある者は福なり、學識ある者は福なり、天才ある者は福なり、權力ある者は福なりと。然れどもイエスは其何れをも福と稱し給はなかつた。其反對にイエスが福と稱へ給ひし者は此世が不幸と稱ふる者であつた。貧しき者、哀む者、人に責めらるゝ者 饑え渴く如く富貴ならで義を慕ふ者、柔和なる者、斯かる者が福なりと云ふ。愚か狂か聖か、聽者は其意味を探るに窮したであらう。而かもイエスは權威を以て是等の言を發し給うたのである。是は勿論イエスの確信であつたのである。卽ち世の云ふ幸福は不幸である。世の云ふ不幸は幸福である。此の世と天國とは全然性質を異にするとイエスは敎へ給うたのである。垂訓發端の言が既に革命的である。誰か之に堪へ得る者ぞ。世が之に堪へ得ないは勿論の事、所謂基督信者さへ之を聽くも信じない。貧の幸福、悲哀の幸福、饑渴の幸福、迫害の

幸福、イエスは開口一番斯かる幸福を述べ給うた。山上の垂訓の何たる乎は此驚くべき序言に由て略ぼ推測する事が出來る。

山上の垂訓又は説教の名は英語の The sermon on the mount 又獨逸語の Die Bergpredigt の譯字である。然し是れ適當の名ではない。馬可傳が記すが如く「神の國の福音」と稱ぶが本當である。訓誡又は説教でない。福音である。イエスが天上より持來り給ひし喜ばしき音信である。名は實を示すを要す。之を福音と稱せずして垂訓と呼びしが故に多くの有害なる誤解を招いたのである。

「イエス許多の人を見て山に登り」とある。「見て之を避けて」と解する事も出來る。卽ち群衆を避けて弟子等を伴ひて靜かなる山に登り其所に彼等(弟子等)を敎へ給へりと解する事も出來る。私も曾て此の解釋を取り之を世に紹介した事がある。然し乍ら遠き國々よりイエスに聽かんとて來りし聽衆が、彼が山に登り給ひたればとて麓に殘り居やう筈がない。故に「見て」は「伴て」と解す

るのが當然であると思ふ。正誤の意味にて此事を附記する。

第十六回　祝福の辭(上)

馬太傳五章三—十節。路加傳六章二十—二三節。

祝福の辭は八音である。其各個が美しくある。其全體が美しくある。或は巧みに刻まれたるダイヤモンドの如くに、福音の光は燦然として其各面より照り輝き、全面は相互に調和して一大寶石を形成する。

「福なり」と言ひてイエスが神の子たるの權威を以て祝福を宣告し給うたのである。其人が祝福を感じたのではない。彼は哀み、饑え渴きつゝあるのである。然し人が(彼れ自身も其一人である)不幸と思ひつゝある時に、イエスは「福なり」と宣告を下し給うたのである。誤らざるイエスの御意見である。祝福は

實現したのではない、預言され約束されたのである。人の評價ではない、神の宣言である。故に信仰を以て受くべき者である。

「心(又は靈)の貧しき者は福なり」と云ふ。心より貧しき者、靈魂(たましひ)の根柢より貧しき者を云ふ。物に貧しくして心に驕る者がある。此世の貧者に此類が多い。然し乍ら本當の貧者は物にも靈にも貧しき者である。即ち「我に賴るべき何物もなし」と感ずる者である。清貧を樂しむ者の如き此種の貧者でない。我に誇るべき義も愛も信も、德は勿論の事、何物もないと感ずる者、即ち根本的に貧しき者、斯かる者は福なりとイエスは宣告し給うたのである。此一節の最も善き註解は路加傳十八章九節より十八節までゞある。就いて見るべし。

「天國は即ち其人の有なれば也」。「天國」は神が人に與へ給ふ幸福の全部である。其半面は心の狀態であり、他の半面は境遇の實現である。天國は完成されたる靈魂と完成されたる宇宙とより成る。故に天國は今既に在る者であつて、

又後に現はるべき者である。「神の國は汝等の内に在り」とのイエスの言に鑑みよ。そして心の貧しき者には天國は今、此世に於て與へらるべしとの事である。未來の事ではない、現在の事である。心の空虛(むなし)き者、根本的に謙遜なる者は、今、未來に於ける神の國の實現を待たずして、天國を其有とする事が出來るとのイエスの宣言又は約束である。「神の國は飲食に非ず義と和と聖靈に由る歡樂(よろこび)にあり」との羅馬書十四章十七節に於てパウロが唱へしものを云ふ。此は確かに信者が今の生涯に於て授かり得る天國である。天國の全部ではないが然し天國たるに相違ない。

「哀む者は福なり」と云ふ。すべての悲哀(かなしみ)が福なるのではない。「それ神に循ふ憂(うれひ)(悲しみ)は悔(くひ)なきの救を得るの悔改に至らしむ。然れど世の憂は死に至らしむる也」とある(コリント後書七章十節)。事業失敗の悲しみ、罪惡露顯の悲しみ、其他此世のすべての悲しみ、是は皆な肉を減じ、骨を枯らし、死に至らしむる悲哀である。

そして之に對して神に循ふ悲哀がある。己が罪を悲み、缺點多きに悶え、光を仰ぎながら猶ほ暗きに彷徨ふを歎く。又世が何時までも神に叛き、其結果として何時までも禍患困窮の内に苦しむを悲む。己が爲に悲み、世の爲に悲む。斯かる者は福なりとイエスは宣べ給うたのである。所謂高貴なる悲哀（noble sorrow）である。然れども高貴なるが故に其れ丈け深くある、激しくある。ルーテル、クロムウエル、バンヤン等がすべて實驗せし所の悲哀である。幾年も眞暗黑に彷徨ふ苦痛である。自分としては不幸の頂上である。此世の冷笑、敎會の疑察を受くるに至らしむる悲哀である。然るにイエスは宣べ給うたのである「其人は福なり」と。

「其人は慰安を得べければ也」と。人間の言葉として「なぐさめ」は意味の輕い詞である。日本語の「なぐさめ」は「投ぐ」又は「和ぐ」より出た詞である。「憂を投げ」又は「和ぐる事」、卽ち「憂晴し」、其れが「慰め」である。卽ち悲哀

の宥め又は緩和である。之を取除く事でない。然し乍ら神に在りて慰めは深い重い意味の詞である。本當の慰めは悲みの取除である。悲哀の原因を取去りて之に代るに歡喜を以てする事である。そして神は如斯くにして悲む者を慰め給ふとの事である。實に偉大なる御約束である。罪を悲しむ者に其罪を取除き之に代るに義を以てし給ふとの事である。死を哀む者に死を滅して之に代るに再び死なざる生命を以てし給ふとの事である。是が本當の慰めである。「歎き悲み、甚く憂ふる聲ラマに聞ゆ、ラケル其兒子を歎き、其兒子の無きによりて慰めを得ず」とある（マタイ傳二章十八）。そしてラケルを慰むる唯一の途は、彼女が失ひし兒子を再び彼女に與ふるにある。其れ以外の途を以て彼女を慰むる事は出來ない。そして神は此意味に於てラケルを慰め給ふとの事である。そしてラケルのみならず、すべて兒子を失ひて歎き悲み、甚く憂ふる此世の母と父とを慰め給ふとの事である。子を再び其親の懷に返して彼等を慰め給ふのである。玆に

於てか復活の希望、キリスト再臨の希望、萬物復興の希望が、イエスの傳道の初期に於て既に提示されたのである。

故に「慰めを得べければ也」である。未來動詞である。未來に於て施さると記さる。勿論此世に於て與へらると云ふに對して、慰めは未來に於て施さると記さる。勿論此世に於ても信者に慰めがないではない。然し乍ら是れ約束の慰めである。「神彼等の目の涕を悉く拭ひ取り復た死あらず哀み痛み有るなし」との慰めの御言葉である（默示錄廿一章四節）。然し御言葉であつて事實ではない。そして神の約束の御言葉が事實となりて現はるゝ時に、其の時に本當の慰安があるのである。

「柔和なる者は福なり」。註解者は言ふ、茲に云ふ柔和は神に對する柔和であつて、人に對する柔和でないと。即ち原語の praus は宗教的の詞であると。若しさうであるとすれば「柔和なる者」とは呟くことなくして神の降し給ふ凡ての困苦を受くる者を云ふのである。即ちイエス御自身が此意味に於ての柔和なる

者の模範であつた「彼は苦しめらるれども自から謙下りて口を開かず、屠場に引かるゝ羔の如く、毛をきる者の前に默す羊の如くして其口を開かざりき」と彼に就いて預言せられしが如くに彼は行ひ給うた（イザヤ書五十三章七節）。愛の神を信じながら身に災禍が臨むも能く之に堪へ、反て神を讃美するの心、それが柔和の心である。そして斯かる心を持つた者は福であるとの事である。

神に對して柔和なる者は勿論人に對しても柔和である。默して神の鞭を受け給ひしイエスは亦默して人の詬をも受け給うた（ペテロ前書二章廿一—廿四節を見よ）。故に柔和なる者は此世に於て虐げらるゝ者、常に劣敗者の地位に置かるゝ者である。然るにイエスは宣告して言ひ給ふ「其人は地を嗣ぐ事を得べければ也」と。茲に明かにイエスの終末觀が示されてある。信者は單に靈的にのみ惠まるゝ者ではない、物的にも亦終には世界の持主となるのであると。驚くべき宣告である。神が爲し給ふがまゝに自己を委ぬる者、此世に在りては本當の

意味に於ての無產階級、常に割の惡い地位に居る者、其者が終には全地を神より賜はると云ふのである。此事を知るが故に本當の基督信者は財產爭ひをしない。又殊更に社會主義を唱へて貴族や富豪に富の分配を迫らない。信者は靜に神が全世界を彼に賜ふ其時を待つのである。

第十七回　祝福の辭（中）

「餓え渴く如く義を慕ふ者」。「義に餓え又渴く者」と譯すべきである。利に餓え慾に渴くが人の常である。稀れには知識に餓え渴く者がある。然れども義に餓え渴く者は更に稀である。人に義人として崇められんと欲するのではない。又自分の良心を滿足させんと欲するに止まらない。神の前に義たらんと欲するのである。是れ人が懷き得る最高の欲望である。そして此欲望ありて初めて本

當の宗教心があるのである。宗教他なし、完全の義に達する事である。「天に在す汝等の父が完全きが如く汝等も完全く成るべし」と云ふのがイエスが其弟子より要求し給ふ所である。そして此要求に應せんとして努力奮鬪した者があつた、又あるとは實に人類の名譽である。「鹿の溪河を慕ひ喘ぐが如く我靈魂は渴ける如くに神を慕ふ、活ける神をぞ慕ふ。何れの時にか我れ往きて神の聖前に出ん」とイスラエルの詩人は歌うた（詩四十二篇）。そして單に遠方より義の神に憧憬るゝのみならず、直に其臺前に達せんと欲して勇進した者があつた。そして其の最も好き例がタルソのパウロである。羅馬書第七章は最も鮮かに此精神的狀態を示す者である。「噫我れ困苦る人なる哉、この死の體より我を救はん者は誰ぞや。是れ我等の主イエスキリストなるが故に神に感謝す」と。そしてルーテル、バンヤン、クロムウエル、ブレナード等に皆な此困苦があつた。近代人の知らざる困苦である。彼等の所謂 Sturm und Drang とは質を異にし、

自己の完成を欲求する困苦に非ずして神に肖んと欲する努力である。人類の奮鬪史に於て、クリスチャンが神の義に達せんと欲して鬪ひし其戰よりも激烈なるものはない。

如斯き者に對してイエスはまた「其人は福なり」と宣告し給うたのである。此は無益の奮鬪に非ず、無謀の欲求に非ずと彼は敎へ給うたのである。實に驚く可き、思ひ切つたる宣告である。義に饑え、完全に渴する者は、其欲求通りに飽く事を得べしとの宣告である。

人は問ふであらう、然らば人は望んで完全の義人たり得るのである乎と。「然り」と聖書は答ふるのである。そして多くのクリスチャンは其事の實である事を實驗した。義に飽く途に二つある。其第一は義とせらるゝ事、卽ち義人ならざるに義人として認めらるゝ事である。其第二は實質的に義たらしめらるゝ事である。第一は罪の此世に於て、罪の身此儘にて、信仰の故に由りて、義とせ

らるゝ事である。第二は信仰の結果として榮化復活の恩惠に與り、神の子キリストが完全きが如く完全くせらるゝ事である。第一は現世の事であり、第二は來世の事である。そして神の爲し給ふ事なるが故に二者何れも確實なる事である。罪の此身に宿る間、我等は完全に義たる事を得ない。然れども我が罪を十字架に釘け給ひしキリストを仰瞻る事に由りて、彼の義を我が義となす事が出來る。又神はキリストに在りて我等を看たまうが故に、我等信仰を以て自己をキリストの衷に置く時に、神は我等の罪を定め給はない。事は理論ではない、實驗である。神の義に逐立られてキリストの十字架の影に隱るゝ時に、罪はもはや我を困しめず、我が心は平安なるを得るのである。義に饑え渴くの必然の結果は十字架贖罪の信仰である。そして此信仰を得て、此世此體に在りながら我は義に飽く事を得るのである。

然し乍ら信仰に由る義は完成せられたる義ではない。信者は今世に於て信仰

的に義とせられて、來世に於て事實的に義とせらるゝのである。「汝等の心の中に善き工を始め給ひし者、之をイエスキリストの日までに全うすべし」とある（ピリピ書一章六節）。「我等の命なるキリストの顯はれん時我等も之と偕に榮の中に顯はるゝ也」とあり（コロサイ書三章四節）、又「愛する者よ我等今神の子たり、後いかん未だ露はれず、彼れ顯はれん時には必ず神に肖んことを知る」とある（ヨハネ第一書三章二節）。信者の義は未だ完うせられたのではない。之はキリストの再臨を待つて全うせらるゝのである。斯くして義に饑え渇く事は決して無益の欲求でない。天然の萬事に於て欲求は充足の預言である。視る物がある故に視る眼があるのである。聽く音がある故に聽く耳があるのである。人の義の欲求あるは其の充たさるゝ證據である。そして罪に沈みし人類の義の實現を不可能視するが故に、イエスは此の驚くべき宣言を爲して義の追求と實行とを奬勵し給うたのである。

「矜恤ある者は福なり云々」。其字義は明瞭である。事實果して如何が問題である。此世に在りては矜恤ある者は必しも福であるとは言ひ得ない。多くの場合に於て矜恤ある者は不幸である。そして大抵の場合に於て矜恤ある者は損である。矜恤は成功するの途でない。自分の利益を省みずして他人の利益を計りて此世に於ける成功は甚だ覺束ない。殊に國家の外交政略に於て矜恤は禁物である。弱國を隣れみ、其貴尊利益を思ふて富强を致した國家は一つもない。其點に於て英國、伊國、佛國、米國、日本、孰れも擇む所はない。外交的に見て矜恤ある者は不幸なり、其國は侮辱せらるべければ也である。そして今や基督教會に於てすら矜恤は矜恤を以て報いられない。弱き他教會を壞して强き自分の教會を盛にする事は、別に惡い事であるとは思はれない。優勝劣敗が進化の理であると信ぜらるゝ今日、矜恤は軟弱であつて排斥すべきである。ニイチエの哲學が近代人に歡ばるゝ理由の一は、確に矜恤と稱するが如き女性的性格の排

斥に於てあるのである。

然るにイエスは教へ給ふ「矜恤ある者は福なり、其人は矜恤を得べければ也」と。憐む者は憐まれる。誰に？　何處で？　此世に於ても多少はさうである。然れども殊に著るしく、神に、未來の裁判の場に於てである。「憐むことをせざる者は鞫かるゝ時また憐まるゝこと無からん。矜恤は鞫に勝つなり」と使徒ヤコブが教へし通りである（雅各書二章十三節）。そして信者は何よりも此鞫きを恐れ、安全に之を通過せんと欲するのである。此は無用の恐怖であると言ふ者は誰か。自分の罪に覺めた者は此恐怖を懷くが當然である。「汝の僕の審判に關係ひ給ふ勿れ、そは活ける者一人だに聖前に義とせらるゝはなし」とは聖詩人の叫びであつた（詩百四十三篇二節）。そしてすべての聖徒に此叫びがあるのである。「神は燬盡す火なり」とは狂人の腦裡に畫かれたる想像ではない。睡眠狀態より覺めたる時の人の實驗である。そして自身審判かるべき地位に在る者は

他人を審判くに寛大ならざるを得ない。此審判を目前に置いて人に對する矜恤は自然に起る。損益又は成功失敗の問題ではない。我が靈魂永遠の運命に關はる問題である。そして本當の矜恤は未來裁判の觀念より起る者である。强き未來觀念のなき所に本當の深き同情は起らない。情は人の爲ならず自分の爲である。審判を父に委ねられ給ひしイエスは宣べ給うた「矜恤ある者は福なり、其人は審判るゝ時に矜恤を得べければ也」と。ダビデは曰うた「ヱホバよ汝は矜恤ある者には矜恤ある者となりて現はれ給ふ」と（詩篇十八篇廿五節）。人は自分が爲すが如くに神に扱はるゝのである。

第十八回　祝福の辭（下）

「福なり心の清き者は、其人は神を見ることを得べければ也」と。神は清くあ

る、彼に接するに心の清きを要す。「人もし潔らずば主に見ゆることを得ざる也」とある（希伯來書十二章十四節）。主に見ゆるの資格は是れ。冥想も、工夫も、難行苦業も、心を清くせずして神を見ることは出來ない。人は曰ふ清水に魚棲まずと。魚は棲まない、然れども神は宿り給ふ。「心の清き」とは清淨潔白、一點の汚なきを云ふのではない。もし爾なれば神を見ることの出來る者は一人もない。或は曰ふ是れ性的に純潔なるの意であると。卽ち男子としては修道士の、そして女子としては童貞（尼）の生涯を送る事であると。然れども僧尼必しも心の清き者でない事は多くの事實に由て證明せらる。其反對に多くの清き生涯は結婚生活に依て營まれた。性的關係を不潔と見るは多くの不潔を釀すの原因となる。「汝等婚姻の事を凡て貴め、神は苟合又奸淫する者を審判き給ふ」とある（希伯來書十三章四）。聖書は清潔と獨身生活とを同一の事として見ない。

「心の清き者」とは心に僞はりなき者である。其好き例はナタナエルである。

イエス彼の己が所に來るを見、彼を指して曰ひけるは「眞のイスラエル人にして其心詭譎なき者ぞ」と（ヨハネ傳一章四七節）。斯かる人は日本人の内にもある。「眞の日本人にして其心詭譎なき者ぞ」と稱して間違なき者がある。其人は勿論基督者ではない。然し基督者たるの最も善き資格を有する者である。世人は彼を呼んで「正直者」と云ふ。正直である事の外に何の取所なき者として賤視めらる。然れどもイエスは彼を祝して曰ふ「汝は福なり」と。

「神を見る」とは現世に在りてはイエスキリストの面にある神の榮光を拜する事である（コリント後書四章六節）。其結果として來世に在りては面前再臨のキリストに接する事である。「彼の時には面を對せて相見ん」とあるが如し（同前書十三章十二）。所謂「見神」と稱へて漠然として神を冥想する事ではない。歷史的イエスに師事することゝ、再び顯はれ給ふ彼に主として事ふることである。

「和平を求むる者は福なり、其人は神の子と稱へらるべければ也」と。平安（和

平）の神汝等凡の者と共に在さんことを願ふ」とはパウロが屢々用ひし言葉である（ロマ書十五章三三、コリント後十三章十一、ピリピ四章九節等）。「我等の主イエスキリストを死より甦らしゝ平安の神」とヒブライ書記者は言ふ（十三章二十節）。又「神は混亂の神に非ず和平の神」なりとパウロは曰うた（コリント前十四章三三）。イエスキリストの御父なる眞の神は特に和平の神である。戰爭、爭鬪は彼の忌み嫌ひ給ふもの、故に爭鬪を好む者にして彼の子たることは出來ない。勿論時には義の爲に爭はざるを得ずと雖も、それは和平を求むる爲の爭ひであつて、爭ひの爲の爭ひでない。和らぎは最も神らしき行爲である。

「和平を求む」は「和平を行ふ」である。「平和を計る」と云ふのが普通である。人と人との間の、國と國との間の平和を計るが常である。然し乍ら最も貴き和らぎは神と人との間の和らぎである。福音他なし此の貴き和らぎである。

一切のもの神より出づ。彼はキリストに由り我等をして己と和らがしめ且そ

の和らがしむる職を我等に授け給へり。即ち神キリストに在りて世を己と和らがしめ、其罪を之に負はせず、且和らがしむる言を我等に委ね給へり。是故に我等召されてキリストの使者となれり。即ち神我等に託り汝等を勸め給ふが如し。我等キリストに代りて汝等に求ふ、汝等神と和らげよ」

と（コリント後書五章十八以下）。是れが本當唯一の和らぎである。此和らぎがありてすべて他の和らぎがあるのである。そして和平を求むる者はすべて福であるが、茲に示されたる和平を求むる者は特に福である。傳道の福は是である。神が提出し給ひし條件の下に人をして彼と和らがしむる事、其事が傳道である。そして此事に從事する者は福である。所謂信者が出來やうが出來まいが、社會が改まらうが改まるまいが、事其事が福である。「喜びの音信を傳へ、平和を告げ、善き音信を傳へ、救ひを告げ、シオンに向ひて汝の神は統治め給ふと曰ふ者の足は山の上にありて如何に美はしき哉」とあるは此事に從事する者の福祉を述べ

たる言である（イザヤ五二章七、ロマ書十章一五）。傳道にも種々あらうが、神と人との間の平和を計る爲の傳道……世に之に優りて幸福なる者はない。そして此事を行ふ者は神の子と稱へらるべしと云ふ。父母の志を遂げんとするが子の志望である。地上に在りて神の子と稱へらるべき者を見んと欲せば、本當の傳道師を尋ぬべきである。天上に於ける彼の福祉に就ては言ふまでもない。

「義の爲に責めらるゝ者は福なり」。凡ての義に就てさうである。然し次節に「我が爲に人汝等を詭譎又迫害」とあれば、特に神の義たるキリストの福音を指していうたに相違ない。「福音を信じ之を唱へしが爲に責めらるゝ者は福なり」との意である。「凡てキリストイエスに在りて神を敬ひつゝ世を渡らんと志す者は窘（迫害）を受くべし」とある（テモテ後書三章十二節）。迫害は眞福音の附隨物である。是れパウロの所謂身に佩びたるイエスの印記である（ガラタヤ書六章十七節）。眞の信仰に生る證據は身の内に於ては聖靈の結ぶ所の果たる仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、

良善、溫柔等である。そして身の外に於ては不信者並に僞の信者より受る迫害である。前者は主觀的證據、後者は客觀的證據である。内に在る者は外に現はれざるを得ない。眞信仰が傳つて迫害の起らざりし例はない。迫害は我が信仰の實質を確むる者である。故に或る種の迫害に遭はずして人はまだ本當の基督信者でないのである。故に「福なる哉義の爲に責めらるゝ者は」である。其反對にルカ傳に示すが如くに「凡て人汝等を譽めなば禍なる哉」である（六章廿六節）。眞福音は肉の人には必ず嫌はるゝ素質を帶びたる者である。所謂「世に歡迎せらるゝ宗教」は惡魔の宗教である。其事に就ては古今東西變ることなしである。

天國は心の貧しき者の有たり又義の爲に責めらるゝ者の有たりと云ふ。心の空虛、卽ち絕對的謙遜は基督信者の内的狀態の總稱。義の爲に責めらるゝ事卽ち迫害は外的狀態の總稱である。内に謙遜にして外に責めらるゝ者、其人が天

國、卽ち神が人に降し給ふ福祉の總を、今此世より受くる事の出來る者である。そして天國は今世に始つて來世に完成せらる。そして基督信者の凡ての欲求は天國の實現と共に充され、其苦みも亦之と共に慰めらる(除かる)。祝福の辭は基督信者を八方より觀察し、又天國を八方より說明して、兩者の符合一致を示す者である。誠に基督敎の縮寫圖と稱すべきもの、福音的眞理の寶玉である。基督信者は世の所謂聖人、俯仰天地に恥ざる人ではない。己が空乏を感じ、罪を哀み、柔和にして平和を愛し、義に餓え渴き、心詭譎ず、而して世に嫌はるゝ者であると示されて、我等の人生觀は一變するのである。同時に又キリストの基督敎と敎會のそれとの間に大なる差違のある事が判明る。

第十九回　鹽と光

馬太傳五章十三—十六節。

祝福の辭を以て其の何たる乎を示されたるイエスの弟子は、一面に於ては地の鹽であると云ひ、又他の一面に於ては世の光であると云ふ。鹽であり又光であると云ふ。反對性を佩びて而かも必要缺くべからざる者であると云ふ。基督者の世に對する地位を語る言葉にして之よりも深いものはない。

鹽は地に普通なる者の一である。海水の三、三三%は鹽であつて、若し全世界の海水を煮詰めて其鹽分を固めるならば、四百五十萬立方哩の鹽の塊が出來るだらうとの事である。卽ち歐羅巴大陸を十四箇半作り得る丈けの量である

鹽と光

と云ふ。其他岩鹽として存するもの無量。土中に、水中に、動植物の體中に存

在せざるなきは鹽である。人畜の生活に必要缺くべからざる物とて水と日光とを除いて鹽に及ぶものはない。「汝等は地の鹽なり」と宣べ給ひてイエスは彼の弟子の、地に取り此必要性を佩ぶる者なる事を明に示し給うたのである。世は信者を要せず信者は世を要せずと云ふが如きは、イエスの全然承認し給はざる所である。

そして古代人の生活に於て、鹽は現代人のそれに於けるよりも遙に重要なる地位を占めた。鹽は第一に味を附けるもの、第二に腐敗を防ぐものであつた。卽ち古代人唯一の味料であり又防腐劑であつた。彼等に取り鹽なくして生活は絕對的に不可能であつた。彼等は今日の我等の如くに鹽に代るべき何物をも有たなかつた。故に鹽の塊は貨幣として用ひられた。今日給料を Salary（サラリー）と云ふは其事の遺跡である。鹽在て物に味あり、鹽在て腐敗を防ぐ。そして基督者は地に在りて鹽の役目を爲す者であると云ふ。人生に意味を與ふる者、其腐敗を

防ぐ者、眞の基督者なくして人生は無味淡々又腐敗百出して其底止する所を知らず。事は歷史が證明して餘りあり。我國今日の狀態の如き、亦イエスの此言に多くの說明的事實を提供する者である。

鹽は地の加味劑又防腐劑、實に生命其物である。然れども鹽若し其味を失はゞ如何？　何を以てか故（もと）の味に復へさん？　後は用なし外に棄られて人に踐まるゝのみとイエスは宣べ給うた。鹽が味を失ふとは鹽より其鹽分を去りたらばとも、又は鹽若し鹽たるの效力を失ひたらばとも解する事が出來る。原語の意味を强き日本語に譯するならば、「鹽若し馬鹿（△△△）にならば」と云ふが最も適當であると思ふ。鹽若し腐敗物に接する餘りに長きに涉りて、自體腐氣を佩びて加味防腐の用を爲さゞるに至らば如何。世に鹽に味附（あぢつ）ける物なし、故に「馬鹿に成りたる」鹽は外に棄られて人に踐まるゝのみである。イエスは當時のガリラヤ人の日常生活に於ける鹽に關する事實有の儘を語り給うたのである。そして鹽

に關する事實は亦基督者に關する事實である。信仰を失ひたる基督者は味を失ひたる鹽である。後は用なし人に踐まれんのみである。人卽ち不信者に踐まれんのみである。世に憐れなる者にして俗化せる信者の如きはない。

鹽は如何にして永久に味を保存するを得る乎。鹽の上に無限に鹽を加ふるに由てゞある。糠味噌の保存法が亦信仰の保存法である。鹽の上に鹽を加へて糠味噌が永久に其效力を失はざるが如くに（反て舊い丈け善くなるが如くに）、信仰の上に信仰を加へて信者は永久に信仰を持續し、のみならず舊い丈け其れ丈け善くある。聖書の研究も續けず祈禱會にも出席せずして社會運動にのみ從事する信者は、味を失ひたる鹽の如くに、用なくして社會其物にさへ棄てらるゝに至る。

地の鹽である信者は又世の光である。鹽は地にありて之を加味し其腐敗を防ぐもの、然るに光は世を離れて遠く上より之を照す者である。信者は世に在り

て世の屬に非ずとの眞理を更に明白に說明したる譬である。信者は世に接觸せざるべからず。然れども世を解脫して高きより之を敎へ導かざるべからず。常に鹽たるべからず又常に光たるべからず。鹽たると同時に光たるべきである。

信者は世の光たる者である。故に公開公視を避けてはならない。又避くる事が出來ない。山の上に建てられたる城は隱るゝことを得ず。燈を燃して斗の下に置く者はない。必ず燭臺の上に置いて家に在るすべての物を照らさしむる。神は人を召して信者となして彼を社會の隅に隱し置き給はない。彼を人の視る所に置きて世の暗きを照さしめ給ふ。公開を憚り、之を忌嫌ふ信者は神が自分を信者と成し給ひし其聖旨を辨へざる者である。世に燈を燃して之を斗の下に隱すが如き愚者なきに、多くの所謂信者は自分が天の光を受けて其輝の器と成りしは獨り人なき所に隱れて其光輝を樂しまん爲であると思ふ。斯くして彼等は神樣を愚人扱ひにするのである。神の賜物は凡て神の爲の賜物である。之を

我が爲の賜物として樂しまんとする時に、神は直に之を撤回し給ふ。神の最大の賜物たる信仰も亦神の爲に用ふべきである。自から神の置き給ふ所に立ちて世を照し敎へ導くべきである。然かせずして謙遜を裝ひて逃げ隱れ、何よりも公聞を嫌ひ、信仰は窃に之を懷き、窃に信じ窃に父の懷に往かんと欲す。是は謙遜ではない自分勝手である。神は斯かる者に長く信仰を授け給はない。或る程度までの警戒を加へて之に應ぜざれば、彼より信仰の賜物を撤回して、彼を故の暗黑の器と成し給ふ。世に天の光に點ぜられし者尠からざるに關はらず、世は依然として暗黑の世なるは何故なる乎。是等の人達が人に見られん事を恐れて逃げ隱れ、信仰の證明を爲さず、傳道の矢面に立たず、自分は信者なるに努めて不信者を裝ひ、如何にもして人の注意を避けんとして怖惑ふからである。神の御歎き、信者自身の不幸此上なしである。

「此の如く人々の前に汝の光を輝かせ」。山の上に建てられたる城の如くに、又

燭臺の上に置かれたる燈の如くに汝の光を耀かせよ。然り汝を耀かせよと曰はず、汝の衷に點ぜられし汝の光を耀かせよと言ふ。之を包み隱して己れ一人其光を浴びんと欲する勿れ。然かすれば人々汝等の放つ光を仰いで、汝等を譽めずして、天に在す汝等の父を榮むるであらうと。

基督者はすべて世の光である。彼等なくして或は彼等が其光を耀かさずして世は暗黑である。試に思へ、若しすべての基督者が、多くの信者が爲すが如くに絶對的沈默を守りたらば其結果如何と。然らば貴下も私も福音の歡喜を知らずして世を終つたに相違ない。彼等が大膽に其信仰を唱へて呉れたればこそ我等は今日の福祉に居るのである。何故に授けられし光を蔽ひながら世の暗黑を歎くのである乎。「起きよ、光を放てよ、汝の光きたり、ヱホバの榮光汝の上に照出たり。視よ、暗きは地を覆ひ、闇は諸々の民を蔽ふ、然れど汝の上にはヱホバ照出たまひ、其榮光汝の上に顯はる」とある（イザヤ書六十章一、二）。神は其遣はし給

へる人を以て今猶ほ此事を我等に告げ給ふ。若し全世界のクリスチャンが一緒になつて戰爭に反對するならば、戰爭は立所に止むであらう。若し日本中のクリスチャンが一齊に起て福音を唱へるならば、日本國は數年ならずしてキリストの國と成るであらう。

第二十回　キリスト復活の實證

＝復活祭の音信＝

時恰も復活祭に會せし故、山上の垂訓解説の中途ではあるが特にキリストの復活について講じた。左掲はその大意である。

キリスト聖書に應ひて我等の罪のために死に、また聖書に應ひて葬られ、第三日に甦り給へり（甦りて今日に至り給へり）。コリント前書十五章三、四節。

基督教はキリスト復活の事實の上に立つ宗教である。此事實なくして基督教

は起らず、又維持せられず、又今日在るを得ないのである。パウロが曰ひし通り「キリスト若し甦らざりしならば我等の宣る所（福音）は徒然、また汝等（信者）の信仰も徒然らん……若しキリスト甦らざりしならば汝等の信仰は空しく、汝等は尙ほ罪に居らん」である。使徒等の傳へし基督教は誠に一目瞭然である。

然るに今の人は言ふ、キリスト復活の事實は有つても可し無くつても可し、無くてならぬものはキリストの精神である。是れさへあれば、キリストが葬られ、其の肉體が墓の內より甦りたりと云ふが如きは、信ずるも可なり、又信ぜざるも不可ならずと。其點に於て現代人の基督教と使徒等の宣べし原始の基督教との間に根本的の相違がある。教會歷史の泰斗ハーナックは言ふ「我等現代の基督信者に復活祭の信仰はある、然し乍ら復活の事實の信仰はない」と。そして今や復活の事實の信仰なくとも、立派なる基督信者たり得るのである。

然し乍らキリストの復活は單に教義又は信仰箇條ではない。是は道理と實驗とに反し無理に信ずる事ではない。是はまた歴史家の研究を待て證明せらるゝ單の歴史的事實ではない。是は信者の今日の實驗、今日人類の間に働く所の否認し難き事實である。キリストは釋迦や孔子、又はソクラテスと稱ふが如き、一度在つて今は過去に屬する人物である乎。さうでないと基督者は信ずるのである。キリストは今生きて人類の間に強く働き給ふと我等は信ずるのである。

「我れ生れば汝等も生くべし」と彼は曰ひ給うた(ヨハネ傳十四章十九節)。また「夫れ我は世の終末まで常に汝等と偕に在るなり」と言ひ給うた(馬太傳末章末節)。ペテロは曰うた「汝等イエスを見ざれども之れを愛し、今見ずと雖も信じて喜ぶ」と(ペテロ前書一章八節)。イエスは今尚ほ生きて居たまふ。我等と偕に在りて働き給ふ。眼に見えずと雖も其存在は確實であるとは基督信者全體が信じて疑はない所である。斯く云へば多くの人には不思議に聞えるが、然し現

在生き給ふキリストなくして活動の基督教は無いのである。有名なるジョン・ワナメーカーは澁澤子爵を彼のヒラデルヒヤなるベサニー日曜學校に迎へ、キリストと孔子を較べて曰うたとの事である「孔子は死して墓に在り、然れども我がキリストは生きて今や此堂に在し給ふ」と。實に儒教と基督教との間に此根本の相違があるのである。前者は孔子の遺訓である。後者はキリスト直接の指導である。死せる教師と生ける救主、孔子とキリストとの間に死と生との差違がある。

若しキリストが生きて在さないならば、彼の福音は決して發展しないのである。此世の腐敗に伴ふに所謂基督教會其者の腐敗を以てして、如何して基督教の如き超自然的宗教を維持して行く事が出來よう。日本に於ける基督教の如き、維持するに最も困難である。米國人の金ぐらゐを以て到底之れを維持する事は出來ない。然し乍ら復活せるキリストが御自身で其傳道を指揮し給ふのである。

夫れ故に內に敎會はいくら腐敗しても、外には文學博士、理學博士と稱して反對者が何百何千人出でゝも眞の基督敎は少しも恐れないのである。キリストは今日此堂にも在し給ふ。我等彼を見ざれども之を愛し、今見ずと雖も信じて喜ぶ、其快樂は言ひ難く、且つ榮光ありである。キリスト復活の證據は現在に活働し給ふキリストである。此活ける證據があるが故に、我等は聖書の復活に關する記事を讀んで之を信ずる事が出來るのである。此事實を實驗せずして、神學の泰斗と雖もキリストの復活を證明する事が出來ない。復活祭に會して我等は此希望を回復すべきである。

第二十一回　基督敎對舊道德

馬太傳五章一七—四八節。

イエスは初めに天國の民の何である乎を敎へ給うた。天國の民は心の貧しき者、柔和なる者、義に饑え又渴く者云々である。又世に對しては鹽又は光たる者であると敎へ給うた。イエスは次に天國の何でなき乎を示し給うた。其理想を在來のそれと較べて遙かに優る者たるを示し給うた。「我れ汝等に告げん、學者とパリサイの人の義しきよりも汝等の義しき事勝れずば、必ず天國に入る事能はじ」と敎へ給うた。

先づ第一に注意すべきはイエスが權威を以て語り給へることである。我が來れるは律法と豫言者を廢する爲に非ず成就せん爲なりと曰ひ給うた。唯の人の

曰ひ得る事でない。「古の人は言へり……然れども我れ汝等に告げん」と繰返して言ひ給うた。御自身を當時のすべての教師又昔時のすべての預言者等に較べて、彼等以上の權威ある者として教へ給うた。「人々その教に駭き合へり、そは學者の如くならず權威を有てる者の如く教へ給へば也」とある通りである（馬可傳一章廿二節）。イエスは玆に御自分の何である乎を説明し給はなかつた。然れども神の子の如くに語り給うた。「我れ來れり」と云ふは「生れたり」と云ふと異なり彼の先在を示す。イエスは「來るべき者」イスラエルの民が待望みし者であるとは彼れ御自身が自覺し給へる所である。我等は玆に彼に於てイスラエルの教師の一人を見るのでない。律法と預言者に超越して之れを成就する者を拜するのである。

第二に注意すべきは舊約聖書の權威である。「我れ誠に汝等に告げん、天地の盡きざる中に律法の一點一畫も遂げつくさずして廢ることなし」とイエスは言

ひ給うた。一の權威が他の權威を證明したのである。神の子が神の言を證したのである。聖書は天壤と無窮を共にする書であると云ふ。果して然る乎。現代の所謂高等批評家は此點に於てイエスと意見を異にする。天地丈け其れ丈け確實なる聖書！　イエスの聖書は斯かる聖書であつた。我等の聖書は如何。

イエスは破壞者に非ず、建設者なり、建設者たるに止まらず、完成者なりと云ふのである。イエスは安息日を破りたるに非ず、本當に之を守り給うた。其他すべて然りである。律法を成就することは文字通りに之を實行すると云ふ事ではない。文字以上に實行する事である。其の精神を體得して之を實現することである。語を代へて言ふならば、天に在す我等の父の完全きが如く完全くなる事である。そして愛は律法を完全すと云へば神に對し人に對し愛の人と成る事である。最高の程度に於て義を行ふ人と成る事である。律法を成就すると云ふ。實に人として懷き得る最大最高の欲望である。そして肅然として其實行を

宣言せしイエスは人ではない、神の子である。

律法の成就を説明せん爲に五箇の實例を擧げ給うた。十誡第六條の「殺す勿れ」、同第七條の「姦淫する勿れ」、之に加へて「僞の誓を立る勿れ」、「目にて目を償ひ齒にて齒を償へ」、「汝の隣を愛みて其敵を憾むべし」との在來の誡命の解釋説明是れである。勿論完全なる律法は之を以て盡きない。然し乍ら其の何たる乎を示すには之で充分である。新道德の舊道德に優るは、其箇條の多きに於てはない、其精神の徹底したるに於て在る。地球面上何れの地點より井を穿るも終に其中心に達するが如く、律法を何れの箇條より究むるも終に其中心たる愛に達せざるを得ない。山上之垂訓はより高き律法又は道德ではない。律法の精神である。故に新しき誡である。之に律法を見んと欲してはならない、福音を探らなければならない。

殺す勿れとは憎む勿れと云ふ事である。憎む者は殺す者である。憎惡を去り

之に代ふるに愛を以てするまでは殺す事は止まないとイエスは敎へ給うたのである。

姦淫する事勿れとは心に邪念を藏す勿れと云ふ事である。婦(他人の妻)を見て色情を起す者は心の中に既に姦淫したる也との事である。卽ち心を淸くするにあらざれば、姦淫の罪を避くること能はずとの敎である。

神に祈るに方て誓を立つる勿れと云ふ。然れど誠實の神に誓を立つるの必要はない。言葉丈けで充分である。然り然り、否な否な、此より過ぐるは惡より出るなりである。

惡に報ゆるに惡を以てすべしと云ふは誤りである。惡に敵する勿れ。惡人の要求はすべて之を納れよ。是れ惡に勝つ最善の道である。自己の所有に對し慾の絶ゆる時に惡に對する反抗心は無くなるのである。

隣人は愛すべし敵人は憎むべしと云ふは足らず。すべての人を愛すべし。敵

も亦隣人である。神の心を以て心とすべし。神は其日光を善者にも惡者にも照らし、雨を義しき者にも義しからざる者にも降せ給ふ。此心に成りてこそ我等は神の子と稱へらるゝの資格を得たのである。神は愛である。我等は愛の人と成りて神の完全きが如く完全く成ることが出來るのである。

以上がイエスの教訓である。簡短明瞭である。問題は唯「是れ果して實行し得る乎」である。實行し得と云ふが一方の見方である。トルストイの如きがそれである。實行し得ずと云ふが他方の見方である。そして基督教國並に基督教會全體は此見方を取つて、實際上之を無視するに至つた。然し乍ら之はイエスの教訓であつて其弟子たる者の理想である。そして理想は何れの場合に於ても可能不可能を以て取捨すべき者でない。美術家は實現し得ないとて其理想を棄てない。失敗するに關せず之に向つて勇進する。基督者も亦然かすべしである。

そして可能不可能は能力の問題である。人としては爲す能はざる事も神としては容易く爲す事が出來る。「我れ汝を棄ず、我れ汝を助く」と神は言ひ給ふ。我は律法を成就せん爲に來れりとキリストは曰ひ給うた。律法を成就する者は彼である。我等彼の弱き弟子でない。彼れ我等に在りて律法を成就する事が出來る。そして今日まで多くの信者がキリストに在りて自身爲す能はざる事を爲した。キリストは我等を單に責任者と見て、彼の此高遠なる誡命を實行し得ざる者は之を地獄に墮して永遠の刑罰に委ぬべしとは曰ひ給はない。「我を仰瞻よ而して救はれよ」と曰ひ給ふ。惡人にも日を照らし雨を降らす者が、今日直に彼の誡を實行し得ないとて我等を滅しやう筈はない。

又神は我等の弱きを知り給ふ。又此世の罪の世なるを知り給ふ。道德は相對的である。完全なる道德は完全なる世に於てのみ行はる。罪の世に在りて罪の人と共に行ふ道德は、基督者の道德と雖も不完全ならざるを得ない。

「是故に天に在す汝等の父の完全きが如く汝等も完全くすべし」とあるは「完

全く成るべし」と譯すべきである。命令ではない。未來の希望である。神に依頼まば終には神の如くに完全き者と成して下さるとの御約束である。完全は今既に行はれつゝありてかの日に成就せらるゝのである。「汝等の心の中に善き工を始し者之を主イエスキリストの日までに全うすべしと我れ深く信ず」とのパウロの言を參考せよ（ピリピ書一章六節）。

信者は終に完全く成るべき能力を既に己が衷に蓄ふる者である。彼の完全は主イエスキリストに於て在る。イエスは信者の義また聖また贖、即ち完全である。彼が彼を信ぜし時に、彼は聖靈を賜はりて完全即ち全き救拯を約束せられたのである。故に彼はまだ完全の域に達しないが、日に日に完全に向つて進み行きつゝある者である。即ち彼はまだ實質的には完全でないが、信仰的には完全である。完全を望み、之に達するの能力を賜はり、そして日に日に完成せられつゝある者である。イエスは神の子にして天に在す彼の父が完全きが如く完

全き者である。そして信仰を以て彼に繋がる信者は終に彼が完全きが如く完全くならざるを得ない。イエスは人より完全を要求し給ひて、完全に達するの途を備へ給うた。彼は單の嚴格なる立法者ではない。己が定め給ひし律法を行ふの途を備へ給ひし者である。

第二十二回　隱れたる宗教

馬太傳六章一—十八節。

「汝等は世の光なり。山の上に建られたる城は隱るゝ事を得ず」とイエスは其弟子に曰ひ給うた（五章十四節）。同じイエスは又曰ひ給うた「汝等人に見せん爲に其義しきを人の前に行す事を愼むべし」と。即ち隱るゝことを得ず、隱るべしとの事である。父を世に示さん爲には隱るゝ勿れ、自己を世に示さゞらん

爲に隱れよとの事である。信仰に公的なると私的なるとの兩面がある。隱れてはならない場合がある、隱れずばならない場合がある。隱るべからざる時に隱れて信仰は萎靡して振はず、隱るべき時に隱れずして信仰は放散して消失す。イエスは弟子等に信仰の此兩面を示して其の健全を計り給うたのである。

「義」は善行である。善行はすべて隱れて行ふべしとの事である。支那人の言葉を以て曰ふならば德はすべて陰德として施すべしとの事である。そして其事を說明せん爲にイエスは玆に三ッの場合を摘示し給うた。施濟(慈善)、祈禱、斷食、是れである。施濟は人に對する善行、祈禱は神に對する行爲、斷食は自己に對する行動である。慈善、祈禱、斷食と稱して善行の全部を云ふことになる。そして孰れも隱れて爲すべしとの事である。施濟を爲す時に右の手の爲す事を左の手に知らせざる程祕密に爲すべしとの事である。又祈る時には嚴密なる室に入り戶を閉ぢて隱れたるに在す汝の父に祈るべしとの事である。復た斷

食する時には面を洗ひ首に膏を塗り、汝の斷食狀態を人に見られざらん樣に爲すべしとの事である。卽ち善行はすべて善行と意識せずして爲すべしとの事である。

善行の場合に於ても理想の場合に於けるが如く、「是れ果して行ひ得る乎」との問題が起る。而して我等は此問題に對しても他の問題に對するが如くに、「是れ人には能はざる所なり、然れど神には能はざる所なし」との主御自身の御言葉を以て答ふるのみである(馬太傳十九章廿六)。人は道德的努力に由て此完全に達する事は出來ない。然し乍ら神よりキリストの靈卽ち聖靈の恩賜に與りて斯かる心の狀態に成る事が出來る。世には實際に右の手の爲した事を左の手の知らざる慈善家がある。而して斯かる慈善家がキリストの靈に觸れたことのない人の內に在る乎、是れ大なる疑問である。少くとも私自身はイエスの弟子以外に斯かる人に會うた事はない。如何なる形に於ても報賞を要求する慈善は慈善でない。

唯爲す事を喜ぶ慈善、其れが本當の慈善である。慈善は最大の贅澤である。そして世に贅澤に對し報賞を要求する者はない。そして慈善を贅澤にするまでには聖靈の力强き御働きを要する。先づ己が罪人の首なるを示され、又此罪を赦さるゝ途を示され、其上に更に信仰を賜はりて贖罪の恩惠を我有となし得るに至りて我は初めて慈善を最上の贅澤として樂しみ得るに至るのである。德でもない、義務でもない、グレースである。恩惠として始まり、優美に、深切に行はれ、行爲其物に最大の報賞を認むる事、其事が基督者の善行である。クロムウエルが曰うた事がある「我れ既に神より澤山に給料の前拂を受けたれば、何を爲しても之を償ふ事は出來ない」と。そして此心に成りて何人も施濟を爲して之に對して何等の報賞をも求めざるに至る。イエスは我等に誡命を下して單に我等に其實行を迫り給はない。之を實行し得るの途を設け又其途に歩むの力を下し給ふ。イエスの誡命はすべて恩惠下賜の御約束として解すべきである。

今や善行は益々組織化又は制度化されて、隱れたる善の實行は益々稀れになつた。善行はすべて事業と成りつゝある。慈善事業、傳道事業、社會事業すべてが此類である。故にすべてが公的であつて、祕密的なるは益々尠なくなつた。是れ能率を增す爲であると云ふ。然し乍ら慈善は單に空腹を充たし、裸體を掩ふ爲めばかりでない。寂寥を慰め、冷淡を溫むるも亦慈善の目的である。然り其主なる目的である。慈善は物を以てする愛の傳達である。而して此目的を達せんが爲には現代の社會事業としての慈善は甚だ微弱である。恰かも社會化されたる家庭の如くに、家庭が家庭でなくなるのである。斯く言ひて私は社會事業の不用を唱へない。之を補ふに舊式の施濟を以てする必要を主張する。そしてすべての大慈善家は慈善家たる前に貧者の善き友人であつた。先づ善きサマリヤ人たるを得て、然る後に善き慈善家又は社會改良家たり得るのである（路加傳十章廿五—卅七節を見よ）。

祈禱に就て曰はんに、世には祈禱專門の行者がある。又所謂「お祈りの上手なる」信者がある。祈禱は宗教に無くてはならぬ者、故に自づから信仰を言表はす機關として使用せらる。パリサイ人の祈禱の一例としてイエスの擧げ給ひし者に曰く「神よ我は他の人の如く强奪不義姦淫せず、亦此稅吏の如くにも有らざるを謝す、我れ一週に二次斷食し、又すべて獲たる者の十分の一を獻げたり」と（路加傳十八章十一、十二節）。是れ神に對して爲せる演說である。又感謝の辭を藉りて爲せる自己賞讃である。そして今日敎會に於て爲さるゝ祈禱に之に類したる者が尠くない。善き祈禱を獻ぐる事は決して容易い事でない。

すべての公的祈禱は決して僞善でない。多人數相會して共同の祈求を神に獻ぐる時に公的祈禱の必要がある。「天に在す我等の父よ」と云ふ。此任に當る者は熱誠を罩めて會衆を代表して祈るべきである。實に祭司の任に當るのであつて、彼に對して篤き同情と尊敬とを表すべきである。そして人は祭司の任に當

りて大なる危險を冒すのである。自己の信仰が職業化せられ、其職務が藝術化せらるゝの虞がある。誠に同情すべき地位である。彼の僞善を責むるよりも彼の爲に祈るべきである。聖職に僞善多きは聖職其者のみの罪でない。

祈禱の幸福は獨り神と相對する所に在る。又は二人三人主の名に由りて集まる所に在る。神と靈魂との關係は戀愛の言葉を以てするより他に之を說明すの言葉がない。「我が愛する者は我に屬き、我は彼に屬く、彼は百合花の中にてその群を牧ふ」とあるが如し（雅歌二章十六）。人間が綴りし文字の內で、其切なる事に於て、己に覺めし靈魂が其造主なる神を慕ふの情を言表はせし文字に勝るものはない。此點に於て如何なる戀愛文學も到底アウガスチン、パスカル、デビッドブレナード等の祈禱の言葉に及ばないのである。神を本當に愛して僞善は全然不可能である。彼と相對して語る時に、嚴密なる室に入り戶を閉ぢて、隱れたるに在す天の父に語るは當然である。「昧爽にイエス早く起き人なき所に往き其

處にて祈禱せり」とある（馬可傳一章廿五節）。祈禱せん爲に朝早く起る價値がある。登山も之が爲に爲すべし、旅行も之が爲に企つべし。神と密會の場所を選む。是れ信仰養成の爲の大要件である。河の畔、山の巓、海の岸、孰も神と語るに宜し。幸にして人は社交を求めて都會に集合す。我等は此機を逸せず、避阪人なき所に往き、天然を通うして天然の父と交はるべきである。天然も亦信者の祈禱を以て聖められて一層其美はしさを增すのである。

附言　「主の祈禱」はイエスが山上之垂訓の一部分として弟子等に敎へ給ひし者ではないと思ふ。路加傳十一章一節以下十三節までが彼が之を彼等に授け給ひし場合を記して明である。馬太傳記者は祈禱に關する主の敎訓を揭ぐる序に之を此所に記入したのであると思ふ。故に七節以下十五節までを除いて讀で六章前半部の意味は明白になるのである。前の施濟と後の斷食に關する敎訓は何れも「隱れたるに鑑たまふ汝の父は明顯に報ひ給ふべし」との言を以て終つて

居るを見れば、祈禱に關する敎訓も亦同一の言を以て終ると見るが當然である。そして如斯くに見て一節以下十七節までが「汝等人に見られん爲に其義を人の前に行ふ勿れ」との一定の敎訓を傳ふる者であることが判明る。「主の祈禱」の尊きは言ふまでもない。然し之は之として別に研究すべきである。此はまことに基督信者の祈禱の模型である。自己の爲に祈るに非ずして神の爲に祈るのである。故に必ず聽かるゝのである。

第二十三回　空の鳥と野の百合花

馬太傳六章一九—三四節。路加傳十二章一三—三四節。

十九—廿一節。 此世に絕對的安全はない。金庫製造術は如何に進歩せるも、之を破るの術も亦同時に進歩した。アセチリン瓦斯を使用して鋼鐵を切ること

洋刀を以て蠟を切る丈け容易である。銀行制度は如何に完備せるも銀行破綻は決して珍らしい事ではない。殊に獨露の場合の如く國家其物が破産する場合には蓄財は國家と共に消滅する。此世其者が甚だ危險なる者である。之に我が生命財産を託して我は不安ならざらんと欲するも得ない。然れども物は移り世は變れども動かぬは天國である。我等は絶對的に安全なる天國に我が財貨を積みてのみ絶對的に安全なることが出來る。死は近し。岩崎も安田も其積める鉅萬の富を遺し、自身は一錢をも運び得ずして此世を去つた。故にイエスは敎へ給うた「我れ汝等に告げん、不義の財を以て己が友を得よ、此は乏しからん時彼等汝等を永遠の宅に接へんが爲なり」と（路加傳十六章九節）。我等は勿論慈善を以て天國を購ふ事は出來ない。天國は神の子が其血を以て購ひ給ひし者であつて、我等は信仰に由りて之を彼より授かるより他に途がない。然れども天國に入るに空手にて入ると、貯蓄を持つて往くとの別がある。彼所に我等を接ふる者あると

無きとの別がある。天國の財貨とは救はれし靈魂である。拭はれし涙である。我等は天國に入るに信仰が要る。天國を樂しむに善行が要る。財の在る所に心が在る。何故にもつと組織的に、一生懸命に來世の事を研究し、其幸福を得んが爲に計畫し又努力せざる乎。傳道會社設立の如き、其點から見て必要でない乎。

廿二、廿三節。 身の光は眼なり。身の明るきも暗きも眼如何に依る。靈魂もまた同じである。若し中なる光、卽ち靈魂の眼が暗からば、其の暗きこと肉眼の暗きに比ぶべくもない。人生を如何に見る乎。何人に取りても之に勝さりて大切なる問題はない。利慾の眼を以て見る乎、正義の眼を以て見る乎、信仰の眼を以て見る乎。見る眼に由て宇宙人生は一變する。哲學宗敎の必要は玆に在る。其目的は人に瞭なる善き眼を供するにある。其意味に於て、人は何人も生れながらにして瞽である。彼はキリストに眼を開かれて初めて見る事を得るのである。約翰傳第九章を見よ。

廿四節。健全なる瞭なる眼は單純なる眼である。希臘語の haplous は此意味である。「若し汝の眼單純にして單一の目的に向つて注がるゝならば」と譯することが出來る。英譯の If thine eye be single を參考せよ。瞭なる善き眼は單純の眼であつて、暗き惡しき眼は不純なる、複雜なる眼である。卽ち兩つ或は兩つ以上の目的に向て注がるゝ眼である。かるが故に人は二人の主に事ふることは能はずである。神と財（財神）とに兼ね事ふる能はずである。若し事へんと欲するならば彼の眼は暗くなる。所謂「慾に晦されて」其身を誤まる。天國にも往きたし、金も欲しいと云ふ。是れ二夫に見ゆるの女、二君に事ふる士の意である。神は何よりも貳心を嫌ひ給ふ。彼れ御自身が單純であり給ふが故に、彼に父とし事ふる者の單純なるを要求し給ふ。然るに事實は如何？

廿五節。「是故に……思ひ煩ふ勿れ」。地上の萬事盡く不安にして、神のみ惟り信るべき者なれば、汝等思ひ煩ふ勿れとの事である。全く思ふ勿れとは言ひ給

はず。「思ひ煩ふ勿れ」と三十一節までに三度繰返して言ひ給ふ。腓立比書四章六節「何事をも思ひ煩ふ勿れ云々」のパウロの言を參考せよ。原語の merimnaō は意を分つ、心を配る、心配するの意味である。何を食ひ何を衣んとて汝の意を、地と天と、財と神との間に分つ勿れとの事である。神が助け護り給ふ事は確實である。生命が神より出たる事は確實である。之を養ふ爲の糧を賜はざらんや。神が身體を護り給ふは確實である。之を被ふ爲の衣を賜はざらんや。既により大なる生命と身體とを賜へる者が、爭でより小なる賜物を賜はざらんや。「衣食は人間の附物である」との諺を信仰的に言表はしたる言である。

廿六節。「汝等空の鳥を見よ」。路加傳には「鴉を見よ」とある（十二章二四節）最も普通にして卑めらるゝ鳥なるが故に、特に之を選んで言ひ給うたのであらう。鴉は稼ず穡ず倉をも納屋をも有せず、然れども汝等の天の父は之を養ひ給へり、況して汝等をやと。此は鴉に倣ひて耕す勿れ蓄ふる勿れといふ意ではな

い。之に倣ひて思ひ煩ふ勿れとの意である。鳥に夫々本能あるが如く人にも亦それがある。耕作と貯藏は人の本能である。而して鳥が其本能に循ひて思ひ煩はざるが如くに、人も亦其本能に循ひて思ひ煩つてはならない。そして人は神の命に循つて決して食物に不足しない。南洋諸島並に南米諸國に於ては今日と雖も食物問題なるものはない。そして歐米諸國に於ても食物問題は大戰爭を以つて始つたのである。日本に於ても平和主義を執り、酒と煙草とを廢止するならば、今日直に國民に有り餘るの食物を供給する事が出來る。そして個人と雖も大抵の場合に於て食物に缺乏する事はない。殊に福音の爲に働いて日本の如き基督教反對の國に於てすら、神は其僕婢をして饑えしめ給はない事を私自身が實驗した。

廿八節。衣の事に關しても亦同じである。イエスは此時春の小山に於て遙にヘルモン山を望み、足下にガリラヤの湖を瞰下ながら教を垂れ給ひつゝあつた

のである。そして谷となく丘となくパレスチナの春の野に咲亂れつゝありしアネモネ、學名 Anemone coronaria を指して、或は其一輪を手に取りて此美はしき教を述べ給うたのであらう。大王ソロモンが其榮華の極みの時に裝ひたりと云ふは、昔の王衣たる緋の外袍であつたらう。其の染料は海螺の一種より取りたるフィニシヤ國特產の色素であつて、當時世界に鳴渡りたる者であつた。而かもイエスは曰ひ給うたのである。人工の極を盡したる大王ソロモンが玉座に卽きし時の服裝も、此アネモネの花の一輪に及ばなかつたと。イエスは誠に天然を見るの眼を有し給うた。彼は野草を見上げて大王を見下げ給うた。そしてイエスの眼は誤らなかつたのである。我等今日の天然學者は顯微鏡下にアネモネの一輪を置いて、イエスの此言の眞理なるを證明するのである。

「今日野に在りて明日爐に投入れらるゝ」と云ふ。克く所謂「地中海沿岸地方」の天然を語りたる言である。彼得前書一章二四節「それ人は既に草の如く、其

榮は凡て草の花の如し、草は枯れ其花は落つ」を參考せよ。聖書の此言を心に藏して三越又は白木屋に行けよ。イエスや使徒等を待たずして路傍の野草が此世の流行男女を辱かしむるであらう。外を飾る者は大抵は内に淺い者である。内なる美に憧憬るゝ時に人は自づと外に質素に成る。野のアネモネにソロモンの榮華以上の美を認め給ひしイエスは御自身人類の王であつた。王の臣下が王以上の生活を爲すは耻辱である。イエスは御自身簡易生活を營み給ひて其の神の子に最も相應はしき者なる事を敎へ給うた。

第二十四回　基督信者の簡易生活

馬太傳六章十九節以下の再研究。

イエスの垂訓に對し反對を試みて試み得られない事はない。先づ第一に、鳥

は稼くことなく穡ることを爲さず倉に蓄ふることなしと云ふが、それは必しも事實でない。成程烏や雀は蓄へないが、蓄ふる鳥はないではない。伯勞は蛙の干物を作りて之を保存する。梟も亦其巣に食物を貯ふると云ひ、米國產の啄木鳥に其彫りし木の洞の内に椽實の類を蓄ふる者ありと云ふ。其他にカケス、ヒガラ、ゴジフガラの類に貯蓄性の發達してゐる事は鳥類學者の傳ふる所である。殊に又鳥類全體に貯蓄性の乏しきは之に飛翔機が供へてあるからである。鳥類に移轉力が在る故に彼等に一定の場所に食物を蓄ふるの必要がない。故に人に鳥に倣へと云ふは無理であると云ふ事が出來る。然し乍ら是れ垂訓の主意を解せざるより出る反對である。主意は貯蓄に於て在るのではない思煩ひ卽ち心配に於て在るのである。用意貯藏の必要に就ては、イエスは箴言第六章に於けるソロモンの言を忘れ給はなかつた。曰く

惰者よ蟻に行き其爲す所を觀て智慧を得よ。蟻は首領なく有司なく君主なけ

れども夏の中に食を供へ、收穫の時は糧を歛む。惰者よ汝何れの時まで臥息むや、何れの時まで睡りて起きざるや。……然らば汝の貧窮は盜人の如く來り、汝の缺乏は兵士の如く來るべし

と。神の嫌ひ給ふ事にして浪費濫用の如きはない。餘る物を貯へて後日の用に供す、此は決して惡い事ではない。但し貯蓄は神を信ぜざるより起る將來を慮る心より出るものであつてはならない。「ためる」のではなくして「たまる」のでなくてはならない。「少しも廢はざるやうに其の餘りの屑を拾集めよ」とのイエスの言に從ひて行ふものでなくてはならぬ（約翰傳六章十二節）。世には高貴なる貯蓄があるのである。

「誰か能く思ひ煩ひて其生命を寸陰も延べ得んや」とは果して事實なる乎。人は衞生養生に由て其生命を延す事が出來るではない乎。人の命數に定限があると云ふならば、彼は向ふ見ずになつて死を早むるではない乎と。イエスの此言

が文字通りに眞理である乎否やを定むる事は出來ない。然し乍ら其身を神に委ねし信者は神の聖旨以上に生きもせず又それ以内に死にもしない事を知る。「二羽の雀は一錢にて售るに非ずや、然るに汝等の父の許しなくして其一羽も地に隕ることなし……故に懼るゝ勿れ汝等は多くの雀より勝れり」とのイエスの言は克く信者の確信を語る者である（馬太傳十章廿九、卅一）。此確信ありてこそ彼に眞の勇氣が起るのである。「人は其天職を終るまでは不滅であるが如くに見ゆ」とのリビングストンの言を參考せよ。何も科學的に一分一秒も延ばすことが出來ないと云ふのではない。實際的に人の生命は、殊に信者の生命は、神の御手に於て在るのである。然ればとて信者が衞生を怠らないは云ふまでもない。誠に眞の衞生思想は福音が信ぜらるる所に起る。

以上を述べた後に、「野の百合花は勞めず紡がず」に就て語る必要はない。要するにイエスは弟子等に簡易生活を勸め給うたのである。チャールス・ワグナ

ーが其名著『簡易生活』を以て近代人に此生活を鼓吹せし前に、イエスは更に深い意味に於ての簡易生活を示し給うたのである。そしてイエスのみならず、すべての偉大なる人たちは簡易生活の實行者又唱道者であつた。ソクラテス、スピノーザ、ワーヅワス（低き生活と高き思想）、トロー（ワルデン湖畔の生活）、ニコライ、孰れも簡易生活の人達であつた。誠に簡易生活は偉大の特徴の一である。人は衷に足りて外に簡略ならざるを得ない。大思想にあらざれば大希望、是れありて其餘の事は如何でも可のである。文明の進歩と唱へて生活の益々複雑になるは決して眞の進歩でない。複雑なる近代生活の内に懼るべき革命と之に伴ふ破滅が孕まれて居る。單に生存競爭の立場より見るも、簡易生活の民が常に複雑生活の民に勝ち、之に代り來つたのである。若し我等の信仰が我等の生活を簡易にしないならば、此は僞りの信仰であると云ひて間違はない。

然しイエスは單に欲を減じて生活を簡易にせよと曰ひて、消極的簡易生活を

教へ給はなかつた。彼は曰ひ給うた「汝等先づ神の國と其（神の）義とを求めよ。然らば此等のものは皆な汝等に加へらるべし」と。此は簡易生活の原理を說いて其働きを示す言である。卽ち積極的簡易生活と稱すべき者である。簡易にも程度がある。帝王の簡易生活は平民のそれとは違ふ。勞働者の簡易生活を以て學者に迫ることは出來ない。簡易生活は外側の問題でない、內心の問題である。簡易生活に標準はない。然し之を支配するの原理がある。そしてイエスの此言がそれである。

神の國と其義とを目的として生活は自と簡易になるのである。卽ち見る眼を瞭かにして、卽ち單純にして、生活は自づから單純卽ち簡易ならざるを得ないのである。人生は一種の込入りたる機械である。之を各部別々に運轉せんと欲して複雑を極む。然れども動力を其中樞に注集して、全部が簡單容易に運轉する。全注意を神の國と其義とに拂ふて人生の機械も亦圓滑無碍に運轉する。イ